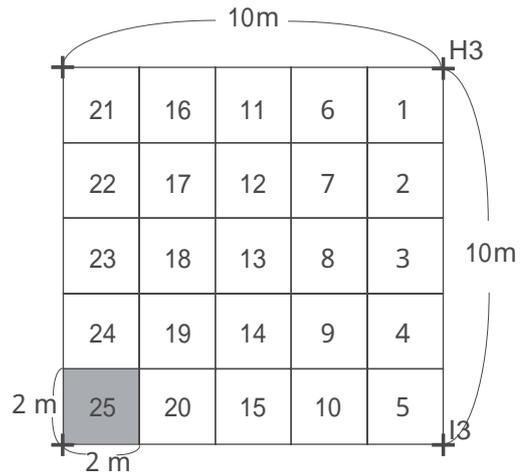


第3節 出土遺物

1 出土遺物の記録方法・概要(第19・20図)

西坪上高尾原遺跡では、本章第1節で述べたように表土及び遺物包含層(a層・b層)中から黒曜石製の石器を中心とする多数の遺物が出土した。本調査では、これら遺物の出土状況をより詳細に把握するために、石器は大きさ5mm未満の碎片を除き原則出土地点を記録した。土器についても、基本的に出土地点を記録している。

第1章でも触れたが、遺物出土地点の記録に伴うグリッドは10m×10mとし、名称は北東隅の杭名を採用した。次に各グリッドを更に2m×2mに分割し、1グリッドにつき25の小グリッドを設定し、小グリッドの名称はグリッド名に枝番号として付した。例えば第19図の網掛け箇所であれば、H3-25と呼称する。



第19図 グリッド及び小グリッド概念図

石器のうち、大きさ5mm以下の碎片については、小グリッド毎に一括して取り上げた。後述する地点ごとにおける出土量の算出は、この小グリッドが基礎単位となっている。

西坪上高尾原遺跡において出土した遺物は、土器と石器である。そのうちのほとんどは石器で、総点数にして11,748点の出土をみた。土器は多くが細片で調査地内からは350点余り出土し、石器と同様、遺物包含層(a層)中からの出土が多数を占める。ほとんど全てが胎土や調整の特徴から縄文土器と考えられる。時期比定が可能な資料は非常に少数だが、多くは前期初頭の西川津式に該当し、石器群も同様な時期に帰属すると考える。

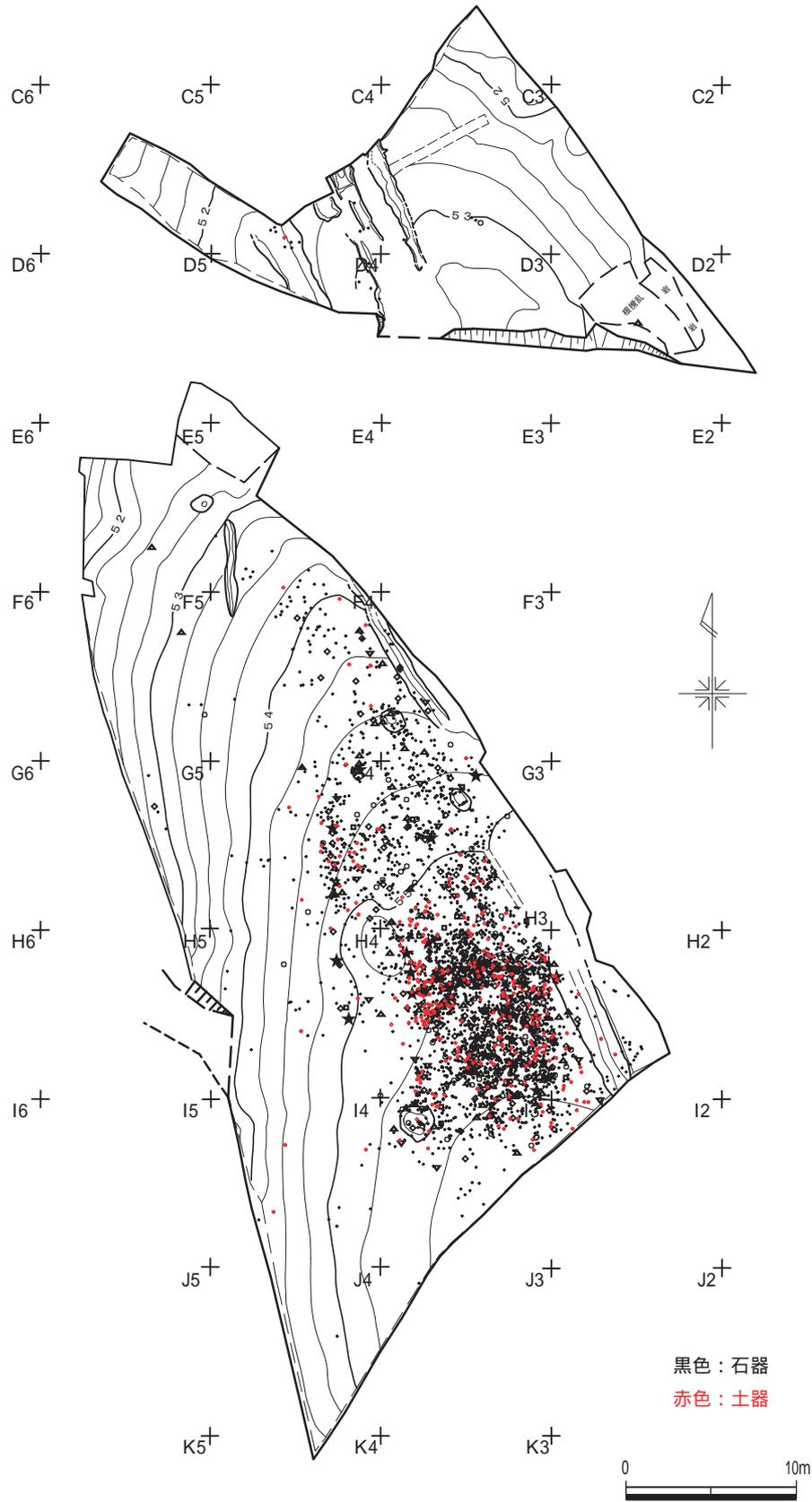
調査地全体の遺物分布を第20図に示した。1区の丘陵尾根筋に分布が集中する。一方、西側の谷へと続く斜面部の分布は薄く、谷方向への流出は少ない。H3グリッドに明瞭な分布の中心があり、北隣のG3グリッドはやや数量が減少するがまとまった出土量がある。G3グリッドより北側、北西側は分布が漸移的に希薄となり、二次的な流出が窺われる。I3グリッド以南は、すぐに調査区外となるため断定はできないが急激に出土数を減じており、遺物分布は南側には展開しないと想定される。

2 石器

概要(第21図、表2)

石材別では総点数11,748点のうち黒曜石製が11,677点で、全体の99%以上と圧倒的多数を占める(表2)。一方、硬質安山岩や流紋岩等、その他の石材は1%にも満たない。石器種別では磨製石器が1点、礫石器が24点で、それ以外の大多数が打製石器に属する。

本報告では、礫石器を除いた出土石器のうち291点を選別し図化した。図化の対象としなかった資料については、大きさ5mm未満の碎片等一括で取り上げた資料を除き、各々の出土位置をプロットした図、法量計測値等のデータをまとめた一覧表を附編として巻末に掲載した。また、出土石器のうち、44点を抽出し産地同定分析を実施した。その結果、黒曜石は風化のため分析不能な試料を除くと、31点中30点が隠岐の久見産となった(残る1点は加茂産)。その他の石材は、香川県坂出市金山産サヌカイトのほか、東伯郡三朝町坂本といった鳥取県中部で産出する安山岩の利用を窺わせる結果を得た。

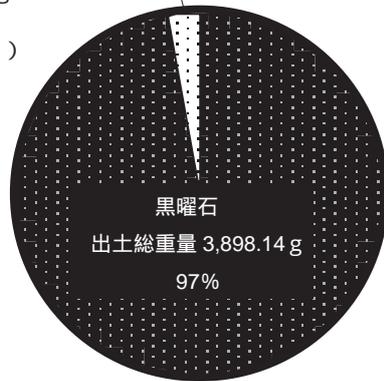


第20図 出土遺物分布図

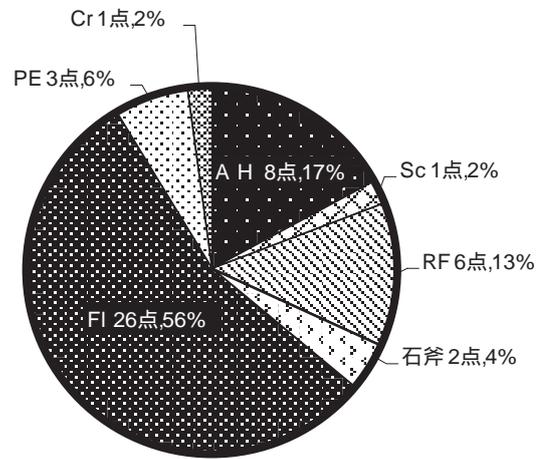
表2 石器石材別組成表

	石器器種							剥片類			両極剥離痕のある石器		石核類		打製石斧	磨製石斧	石錘	磨石 敲石	台石	合計 点数		
	AH	AHBk	Sc	Dr	RF	UF	その他	FI	大Ch	小Ch	PE	PESp	Bk	Cr								
黒曜石	416							11,108			90		63								11,677	
	123	57	27	4	138	54	13	5,284	5,317	507	72	18	24	39								
サヌカイト・ 硬質安山岩・ 流紋岩又は 流紋岩質凝灰岩	15							26			3		1		1	1					47	
粒粗軟質安山岩	8		1		6			26			3			1	1	1			1	12	9	22
花崗岩																		2			2	
器種別総数	131	57	28	4	144	54	13	5,310	5,317	507	75	18	24	40	1	1	1	14	9		11,748	

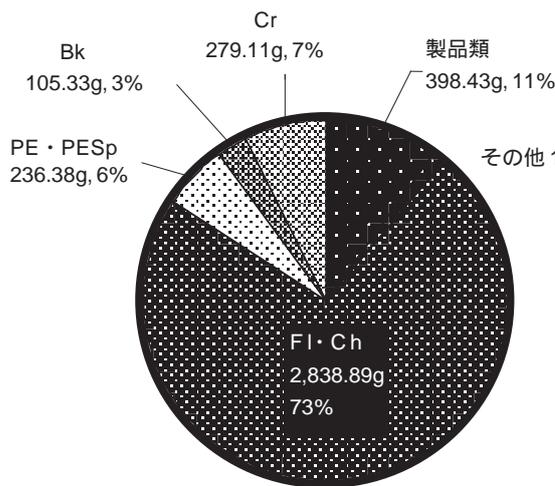
サヌカイト・硬質安山岩
・流紋岩又は流紋岩質凝灰岩
出土重量110.42g
3%
(石斧を除く)



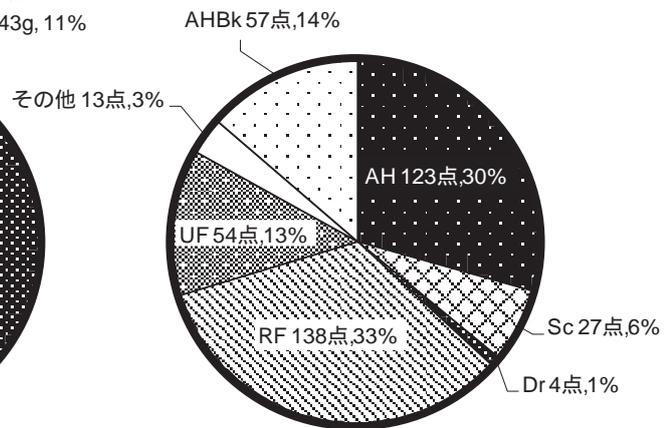
打製石器石材別総重量



黒曜石製以外の石器器種別組成 (礫石器を除く)



黒曜石製石器器種別総重量



黒曜石製石器器種別出土点数 (製品類)

第21図 石器石材及び器種別組成

分析結果の詳細は、第4節1に記載している。

次に、黒曜石製石器の器種別組成について概観する。黒曜石製石器は石鏃、スクレイパー等の石器器種と、石核・剥片・碎片等の石器製作に付随する残滓類に区分される。そのうち残滓類が11,261点と全体の約96%を占めており、当地で石器製作が行われていたことは明白である。なお、残滓類における剥片・碎片については、大きさが1 cm以上のものを剥片、5 mm以上1 cm未満のものを碎片(大)、5 mm未満のものを碎片(小)として分類し、算出した。以下、器種毎にその分類の基準や出土量等、概要について述べていくこととする。

石器器種(黒曜石製)(第21図、表2)

416点出土しており、その内訳を第21図に示した。

石鏃(AH)は、123点出土した。後に詳述するが全て凹基無茎式で、形態・法量にバリエーションがある。そのうち刃部や基部の破片等、欠損したと考えられる資料が多数確認されたが、それらも各々1点として計上した。また、形態的に石鏃を指向したと考えられるが整形が不十分なもの、表裏面における押圧剥離等の二次調整が十分ではないと判断されるものを石鏃未製品(AHBk)として扱った。石鏃及びその未製品は合計で180点と石器器種全体の約43%を占め(第21図)、本遺跡で為された石器製作の主体であったことが分かる。

スクレイパー(Sc)は、二次調整が連続し刃部を形成するものとした。ほとんどが小型品に該当する。27点の出土が認められたが、石器器種全体では6%程度に止まる。

石鏃(Dr)は、剥片の一端を加工し尖らせ、錐状としたものとした。ただ、明瞭な錐部や頭部を持たず、形態的に判別が難しい資料が多い。4点を確認した。

加工痕の有る剥片(RF)は、押圧剥離等の二次調整痕が部分的に認められるものとした。また、二次的な調整痕がわずかでどの器種に該当するかは不明ながら、初期段階の未製品と想定した資料もこの項目に含めている。出土点数は138点で、全体の約33%を占める。

使用痕のある剥片(UF)は、二次的な加工は施されていないが微細剥離痕が連続して認められるものとした。54点(約13%)の出土を確認した。

このように、石器器種の概要についてみてきたが、石鏃を中心とした小型製品に特化し製作されたことが窺える。

残滓類(黒曜石製)(第22図、表2)

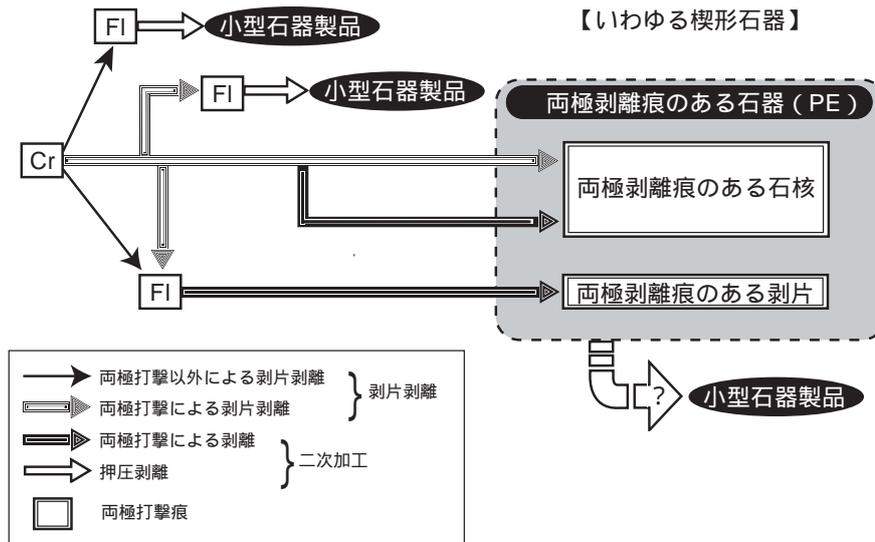
先述のとおり11,261点出土した。剥片・碎片が11,108点とそのほとんどを占める。原石の出土は無い。石核は剥片作出が進行した資料が多く、搬入された段階における素材の法量は不明であるが、大型素材の出土が認められないことから、小型の素材が搬入された可能性が高い。

これらの打撃痕、剥離痕等の観察により、本遺跡における剥片作出から製品に至るまでの概要を第22図に示した。剥片作出の手法に関しては通常に加撃によるもの、両極打撃によるものが確認でき、作出した剥片に二次加工を施し小型製品を製作したと想定できる。本報告では、両極打撃による剥離痕を有する一群を「両極剥離痕のある石器」と呼称する(第22図網掛け部分)。これらは、いわゆる広義の楔形石器に相当する。両極剥離痕のある石器の成因について、次のような3通りを推定した。

両極打撃により剥片剥離が行われた石核

両極打撃による二次的な剥離が認められる石核(残核)

両極打撃による二次的な剥離が認められる剥片



第22図 石器製作工程概念図

と比較し、の両極剥離によって生じた剥片は素材とするには法量が小さいと考える。したがって、とは違うものとして捉えた。に認められる二次的な両極剥離痕の成因としては、両極打撃を用いた加工によるもの、楔など道具として使用した際に生じたものの2通りが指摘できるが、現状では区別が困難である。いずれにしても石核自体が石器に加工されたり使用されたりしたものと考えられる。の剥片に認められる両極剥離痕の成因についてもと同様と考える。

石核 (Cr)としたものは、通常の打撃で剥片剥離が為されたもの、または両極打撃の痕跡は残すものの潰れや階段状の剥離など、明瞭な両極打撃による痕跡を有さないものが該当する。後者の方が主体となり、ほとんどが小型の範疇に属する。39点を確認した。

原形 (Bk)は、明瞭な剥片剥離痕を持たないもので、24点を確認した。

石器破片 (BT)は、何らかの石器器種と考えられるが破片のため詳細が不明なものとした。13点を確認した。

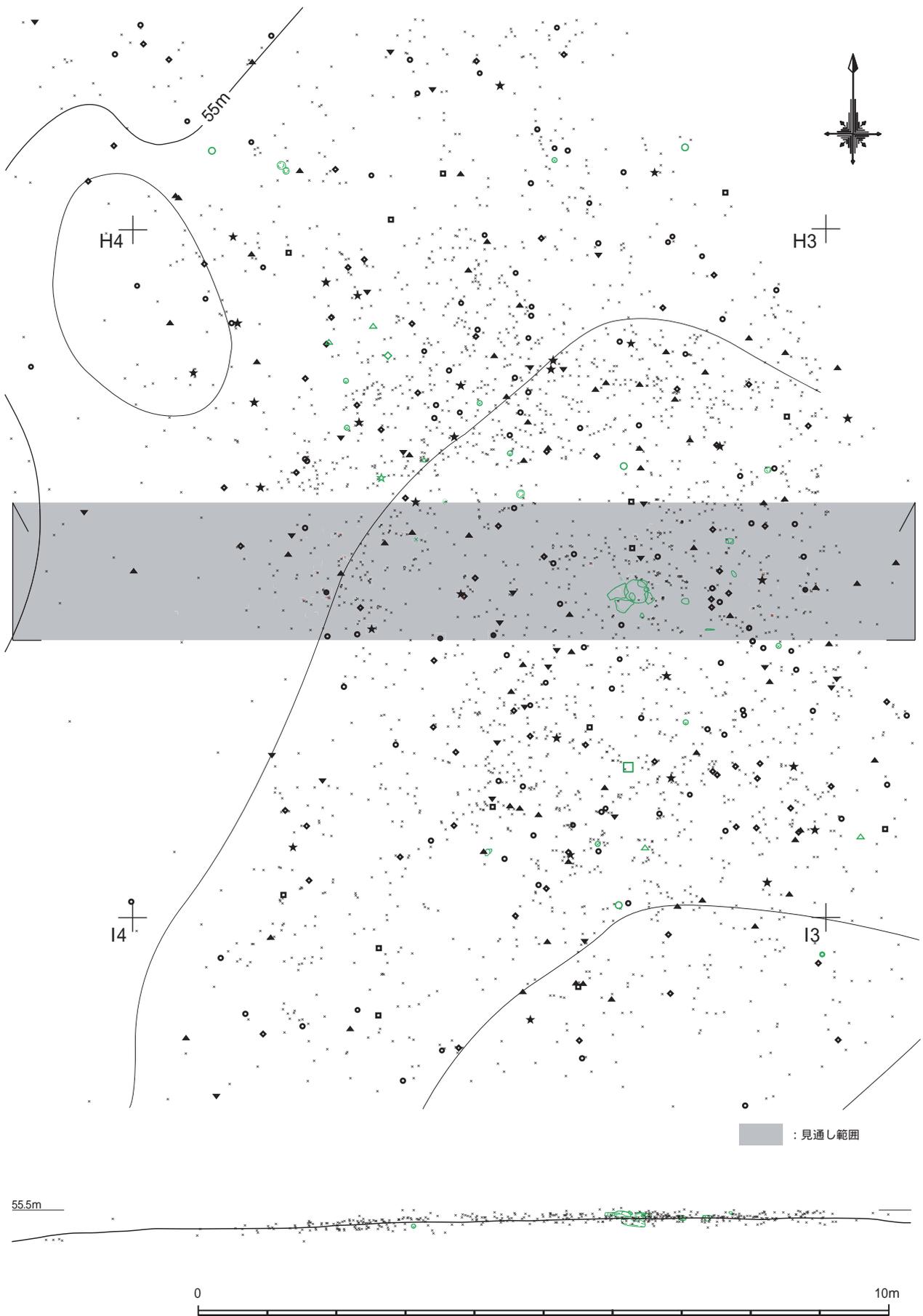
その他の石材製石器(第21図、表2)

黒曜石以外の石材としては、硬質安山岩等があるが、礫石器を除き47点とごく少数である。器種別組成(第21図)では、剥片を除けば石鏃が8点と比較的多く、少数ながら他の石材においても石鏃を中心に製作していたことが窺える。

分布(第23~30図、PL.3~5)

黒曜石製石器について、先述したグリッド及び小グリッド毎の出土量を点数、重量(g)別にそれぞれ算出し、階層分類を行いそれを網掛けの濃淡で表したのが第25~28図である。なお、遺構埋土中から出土した資料が一定数認められるが、石器群との関連性が明確な遺構が無いいため、それらもグリッドないし小グリッドの出土数に反映させることとした。

概要でも触れたように分布の中心はH3グリッドにあり、その出土数量は群を抜いている(第23・25・26図)。当グリッドにおける遺物の垂直分布を見ると、特定の偏りは無く一様である(第23図)。出土点数は7,221点と全体の約62%、出土重量では2,896.77gと全体の約74%を占め、当該グリッドにおける石器製作との関連性は極めて高いと指摘できる。さらに、H3グリッド内には台石等礫石器や



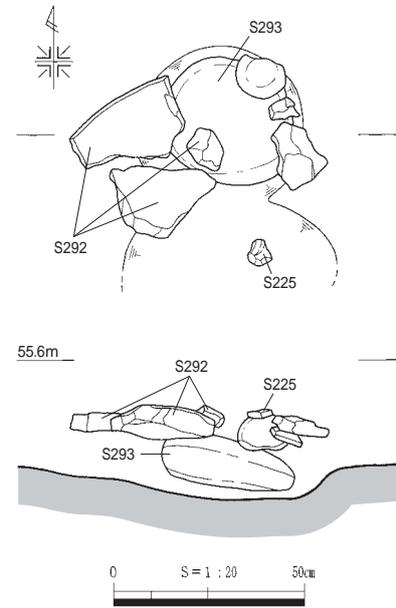
第23図 H3グリッド遺物出土状況図

黒曜石製石核等を検出した箇所(H3 - 8)がある(第24図、巻頭図版1)。台石は2点が重なった状態で出土し、意図的に配置された可能性がある。台石のほか敲石、黒曜石製石核も併せて出土していることから、具体的な使用形態については判然としないが石器製作に付随する可能性が高い。小グリッド単位でみるとH3 - 8を中心に南北隣に出土数量のピークが点数別、重量別共に確認でき(第27・28図) 分布的にも石器製作作業を行った地点と想定できる。

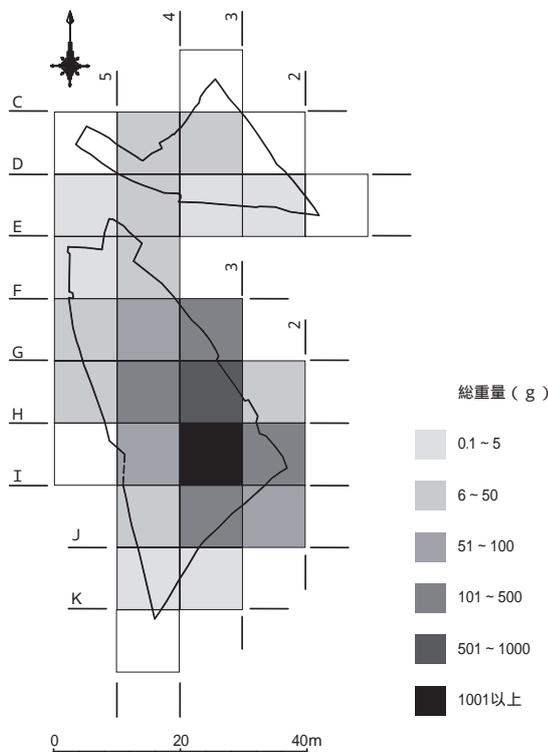
H3グリッドの南隣にあたるI3グリッドでは889点、305.93gと一定数の出土が認められるが、概要でも触れたように小グリッド単位でみると南半で急激に減少しており、出土石器の分布は南側には展開しない可能性が高い。一方、北隣のG3グリッドでは1,715点、588.61gとH3グリッドに次ぐ出土数量があるが、G3グリッドを含めた北側及び北西側は、出土数量が離心減少的な傾向を示し、緩傾斜する地形に沿った二次的な移動が窺われる。西側、南西側の谷へ向けても、同様な状況が確認できる。

黒曜石製石器の中には二次的に被熱を受けた資料が認められ、総数217点を数える。出土位置を記録した150点について分布をみると、それらの多くが石器集中域であるH3グリッド内に散在する(第29図)。明瞭な集中箇所は認められないため火処の特定は難しいが、少なくとも人為的な活動の中心がH3グリッドにあったことは追認できよう。

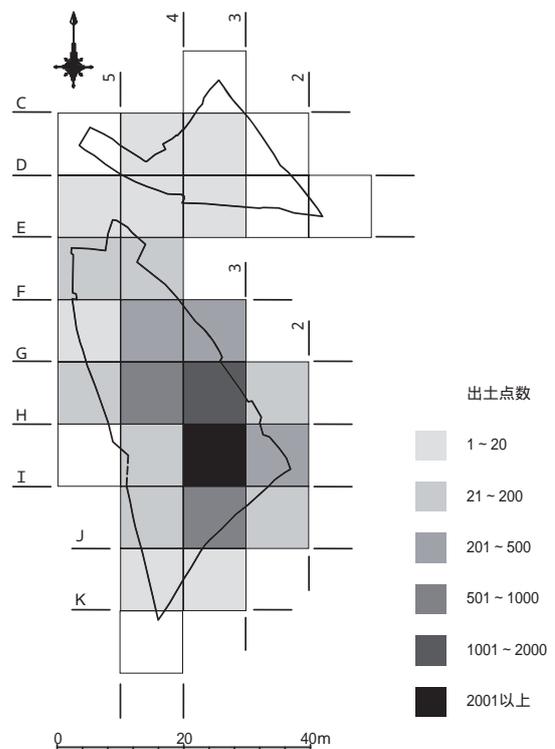
硬質安山岩等、その他の石材による石器について、グリッド



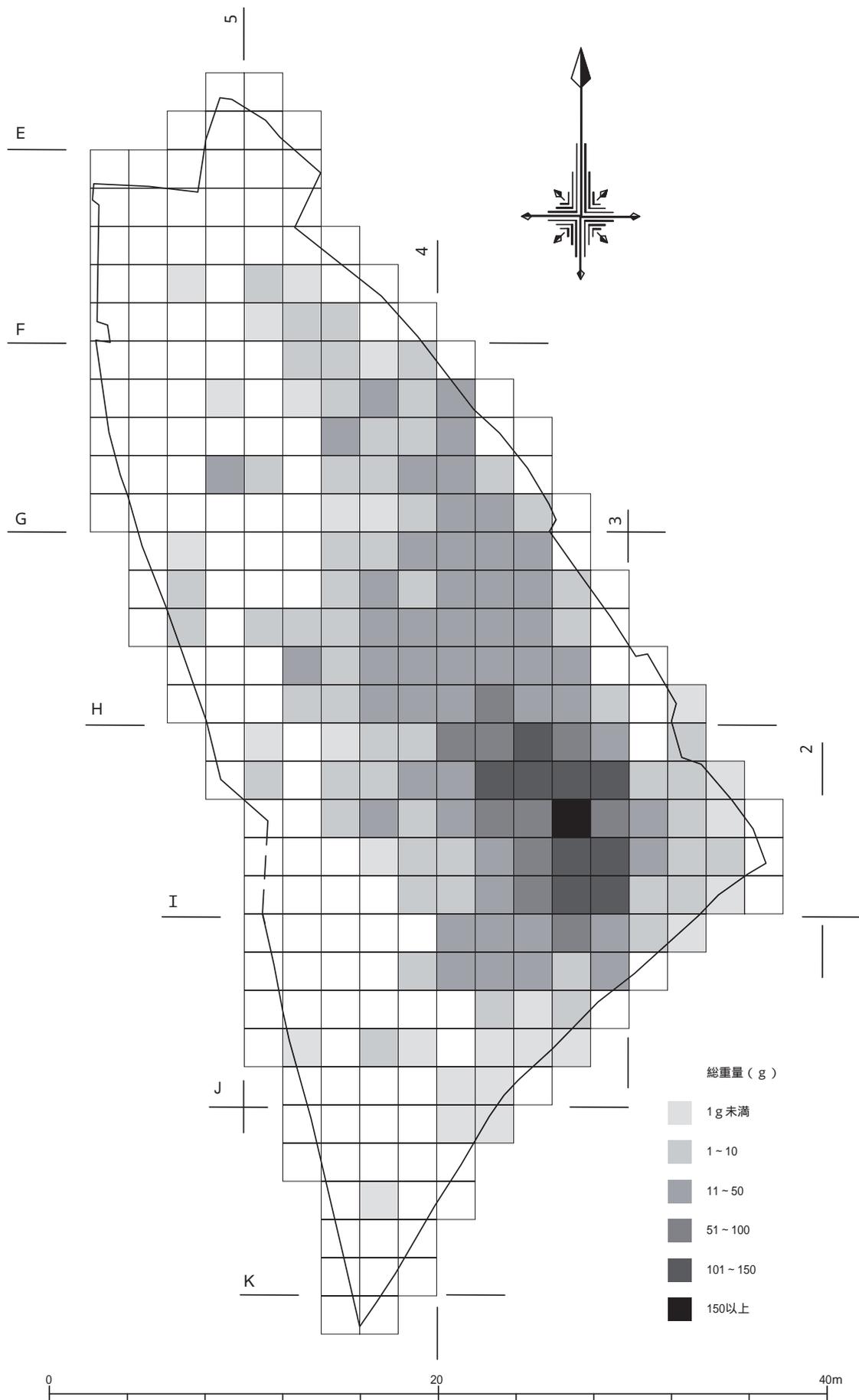
第24図 H3グリッド台石等出土状況図



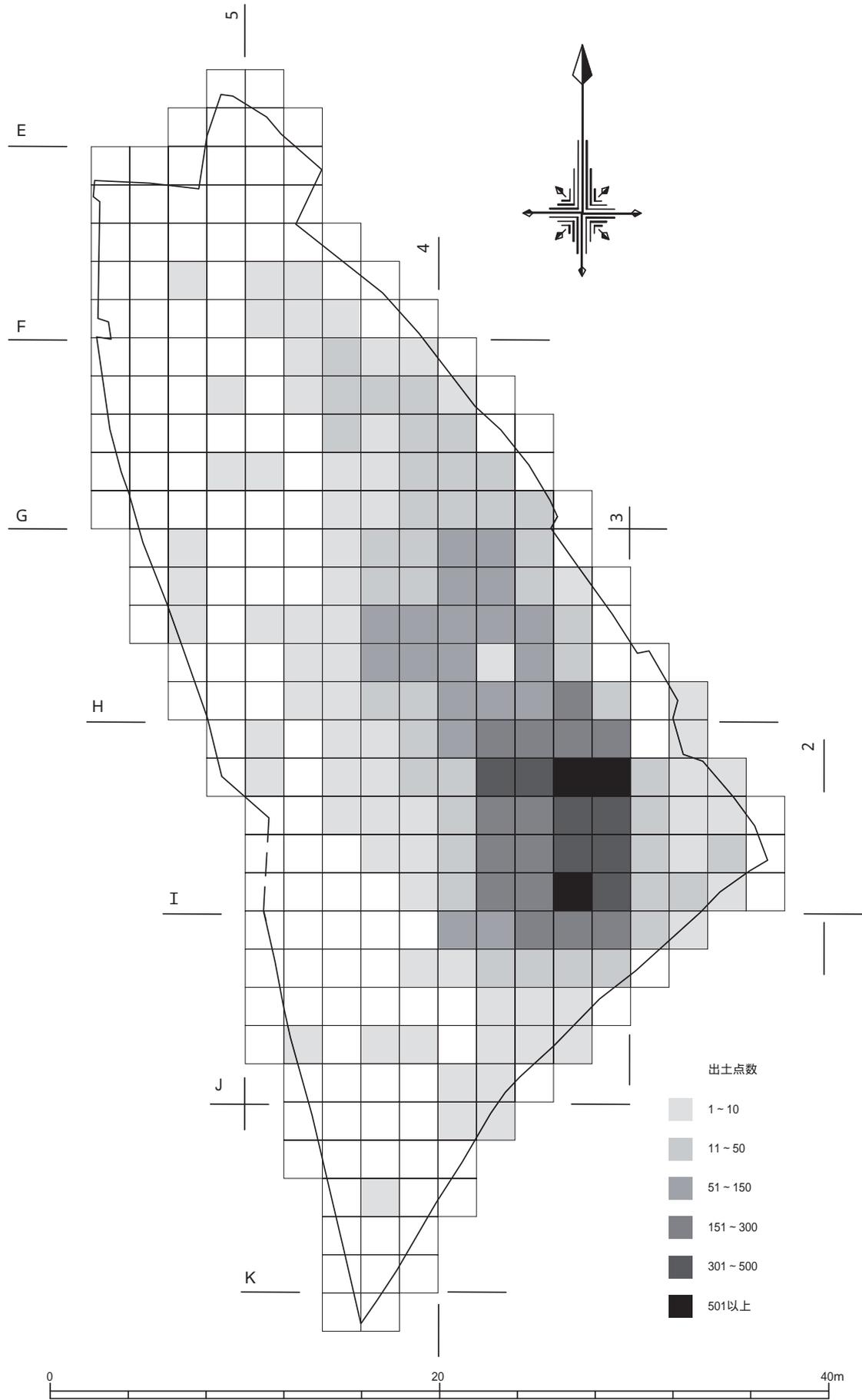
第25図 黒曜石製石器出土重量模式図(大グリッド)



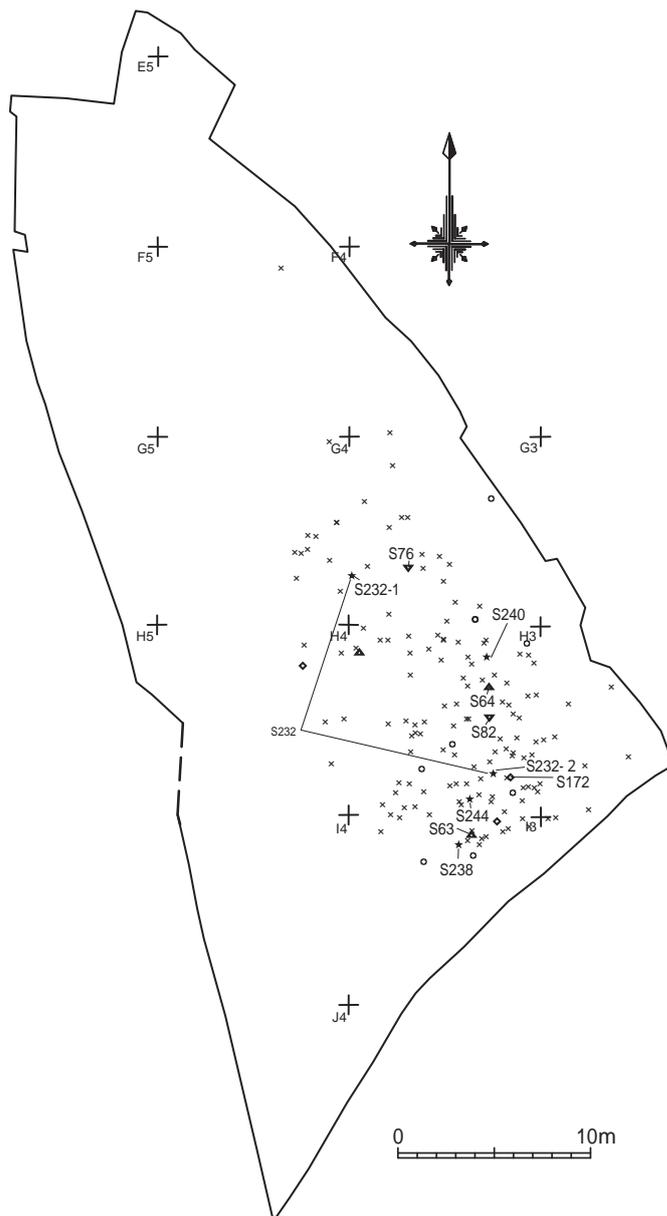
第26図 黒曜石製石器出土点数模式図(大グリッド)



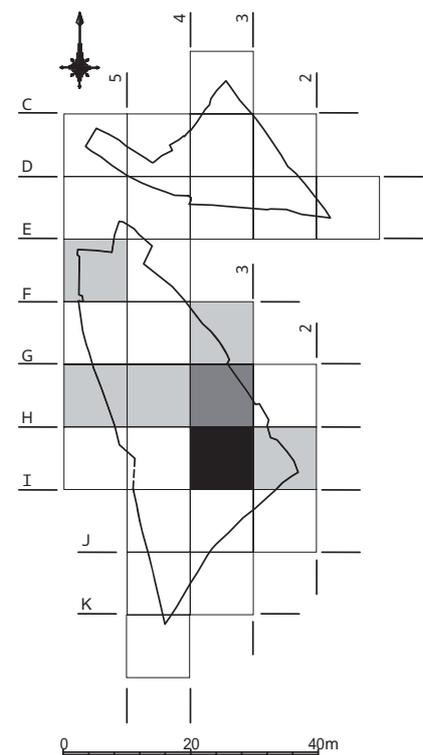
第27図 黒曜石製石器出土重量模式図(小グリッド)



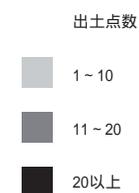
第28図 黒曜石製石器出土点数模式図(小グリッド)



第29図 被熱黒曜石出土地点



第30図 石器グリッド別出土点数
模式図〔安山岩ほか製〕



毎の出土分布を第30図に示した。出土数量が少数ではあるが、H3グリッドに分布が集中し、黒曜石製石器と同様な傾向を示す。

黒曜石製石器

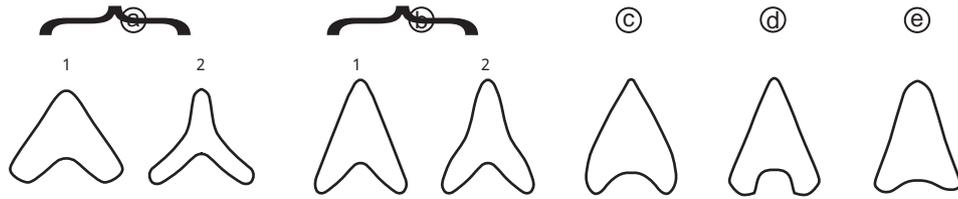
石鏃(第31～35図、PL.14・16)

出土点数は123点である。そのうち、形態が把握できるものが85点、形態の詳細が不明な小片が38点である。全て凹基無茎式で、形態・法量にバリエーションが認められる。

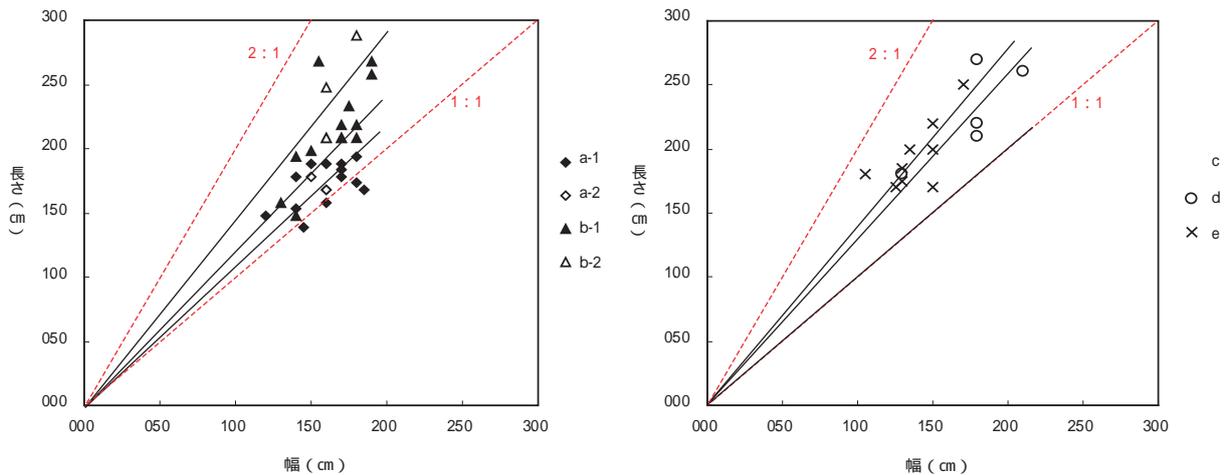
形態については、平面形及び基部の特徴で分類し⁽¹⁾、第31図にその概要を示した。また、第32図は形態別にみた全長と最大幅の比率分布である。

a・b類は基部に三角形状の深い抉りを持つ一群である。本遺跡においては出土数量的に主体を占め、60点(石鏃全体の約49%)を数える。

a類としたものは平面形が正三角形もしくは低三角形状を呈するものである(全長1.0～2.0cm、最大幅1.1～1.9cm)。b類は、長三角形に近い形状のものとした(全長1.2～2.9cm、最大幅1.1～1.9cm)。



第31図 石鏃形態分類概念図



第32図 石鏃長幅相関図

さらに a・b 類については、刃部の平面形態の違いで細分した。a・b 類のうち、刃部が直線的なタイプを a - 1 類、b - 1 類とし、刃部の調整が進行した結果、縁辺が湾曲し抉れたような形状となるものを a - 2 類、b - 2 類とした。ただ、a・b 類における全長・最大幅の比率分布をみると(第 32 図)、分布は漸移的に推移しており、a・b 類のいずれに属するか判断の難しい資料が少なくない。

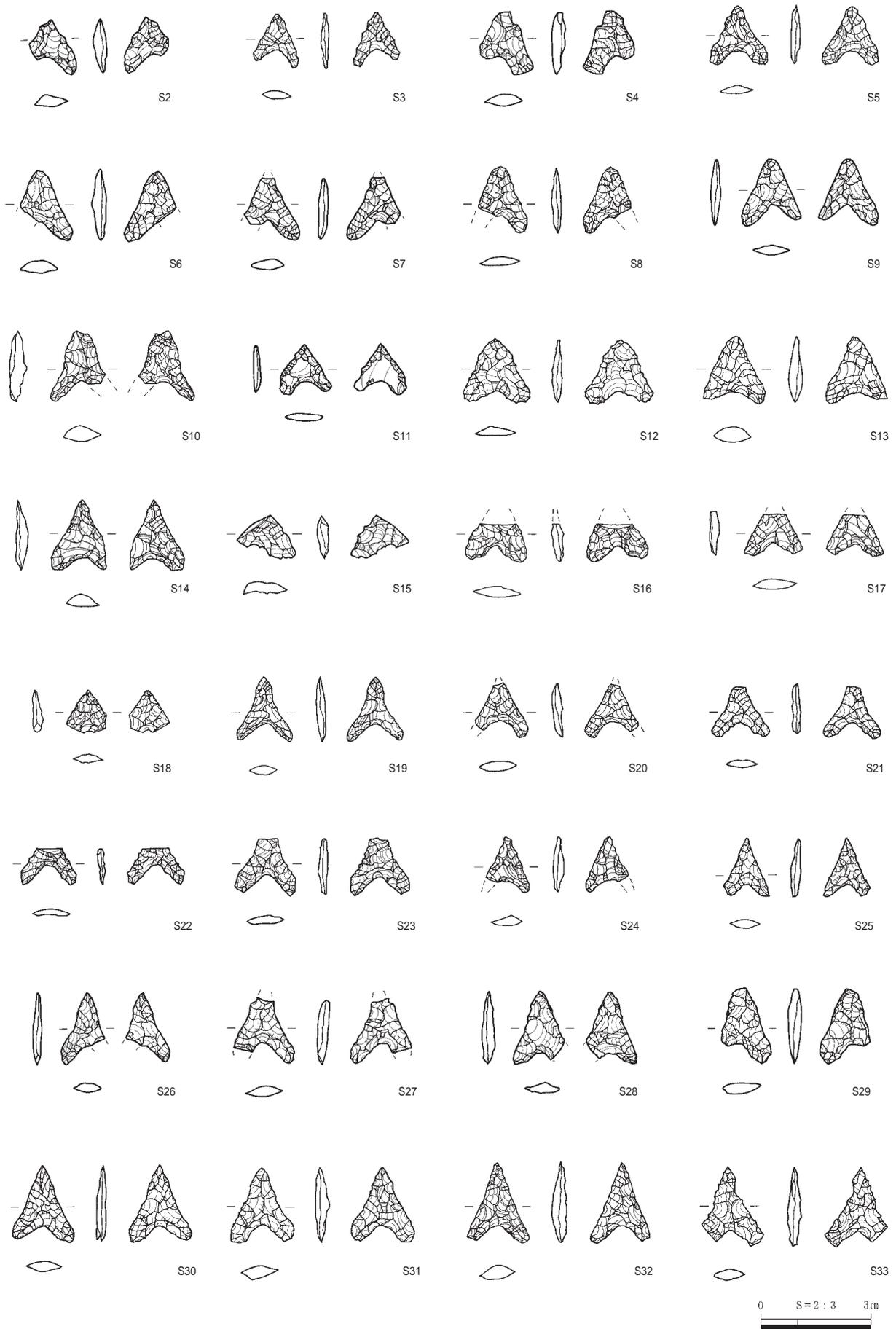
c 類は、a・b 類と同様に抉りが深いが、基部の縁辺がやや丸みを帯びるタイプである。全長は 1.6 ~ 2.2cm、最大幅は 1.0 ~ 1.4cm を測る。

d 類は抉りが深く、抉りの平面形が逆 U 字状を呈するもので、縄文時代早期から前期に特徴的な形態とされている(会下 2002)。全長は 1.8 ~ 2.7cm、最大幅は 1.3 ~ 2.1cm である。

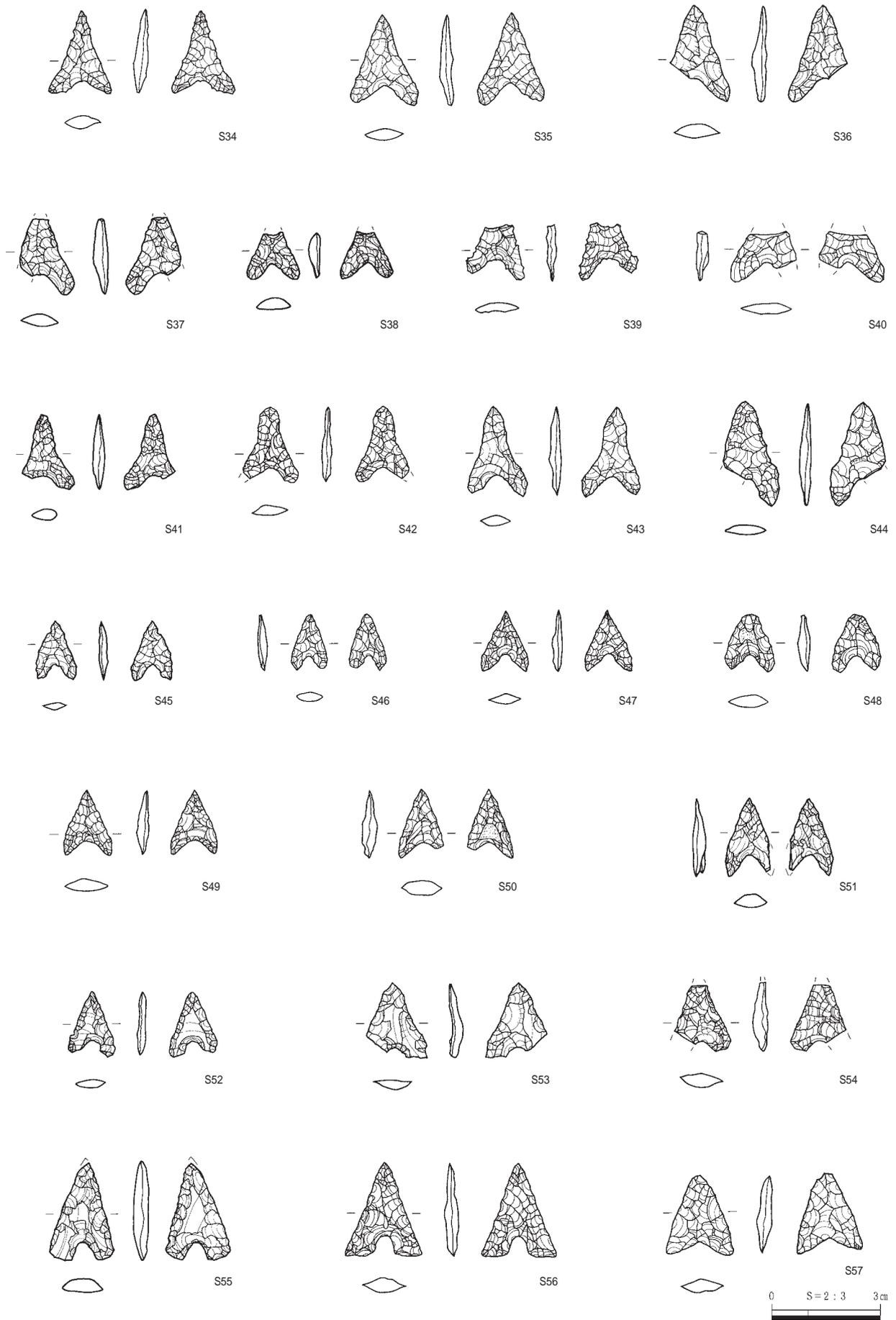
e 類は抉りが比較的浅く、抉りの平面形は弧状を呈する。e 類は形態差が認められ更に細分が可能だが、出土数量が少数であるためここでは一括することとした。全長は 1.6 ~ 2.5cm、最大幅は 1.0 ~ 1.7cm である。c ~ e 類の出土点数は a・b 類と比べて少なく、合計で 23 点と石鏃全体の約 19% に留まる。

素材となる剥片の形態については、押圧剥離等二次調整の進行により素材面をほとんど残さないため不詳だが、剥離痕の様子から見て両極打撃により得られた剥片を素材とした可能性が窺える資料が少数だが確認できる(S53・S55・S68)。

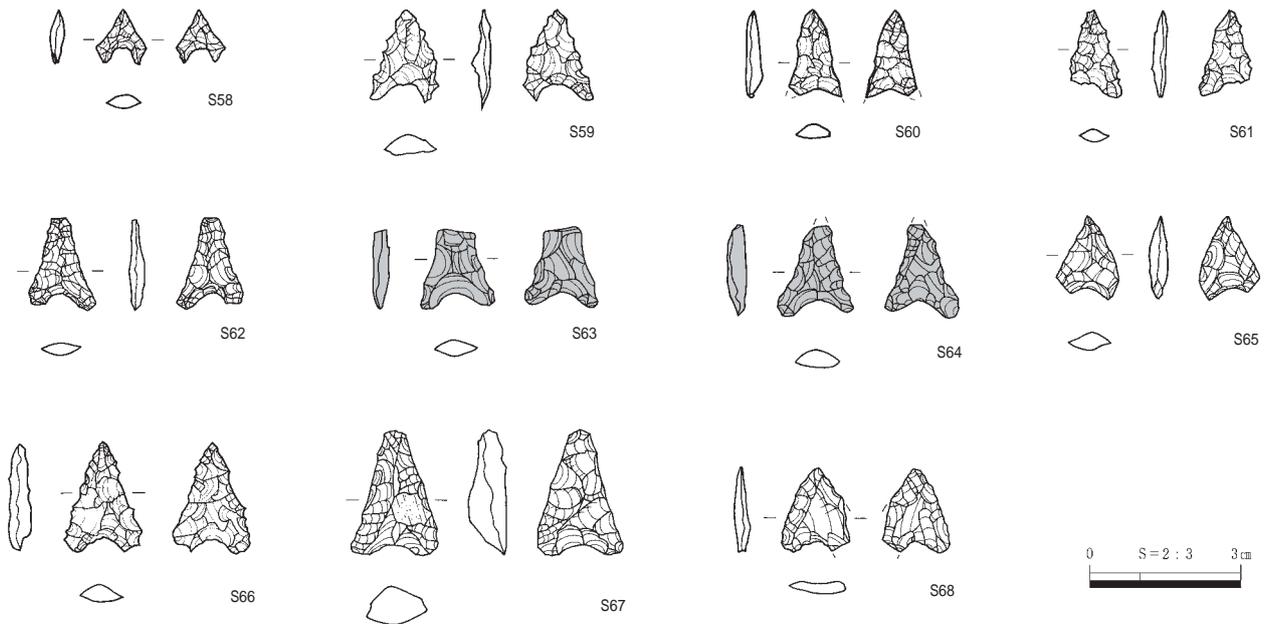
第 33 ~ 35 図に 67 点を選別し図化した。S2 ~ S14 は、a - 1 類に該当する。平面形態は正三角形状を呈し、個体差は若干認められるが抉りが深い。S15 ~ S18 は切先及び基部の破片だが、形状から a - 1 類に該当する可能性がある。S19 ~ S23 は a - 2 類。二次調整が進行し、刃部両縁が抉れたよう



第33圖 石鏃(黑曜石製)(1)



第34図 石鏃(黒曜石製)(2)



第35図 石鏃(黒曜石製)(3)

な形状となる。基部の抉りも特に深く、基部・刃部共に細身となる。

S24～S37はb - 1類で、平面形態は長三角形を呈する。全長にして約1.5～2.7cmと若干法量に幅が認められる。S38～S40は切先を欠損するがb - 1類の可能性はある。S41～S44は平面形態が長三角形で、刃部両縁が抉れ気味となるb - 2類としたものである。

S45～S51はc類とした一群で、刃部は概ね直線的だが、基部の外形が丸みを帯びる。個体差はあるが長い平面形態をとる。

S52～S56はd類で、抉りの平面形が逆U字形を呈する。全長約1.8～2.6cmと法量差がある。

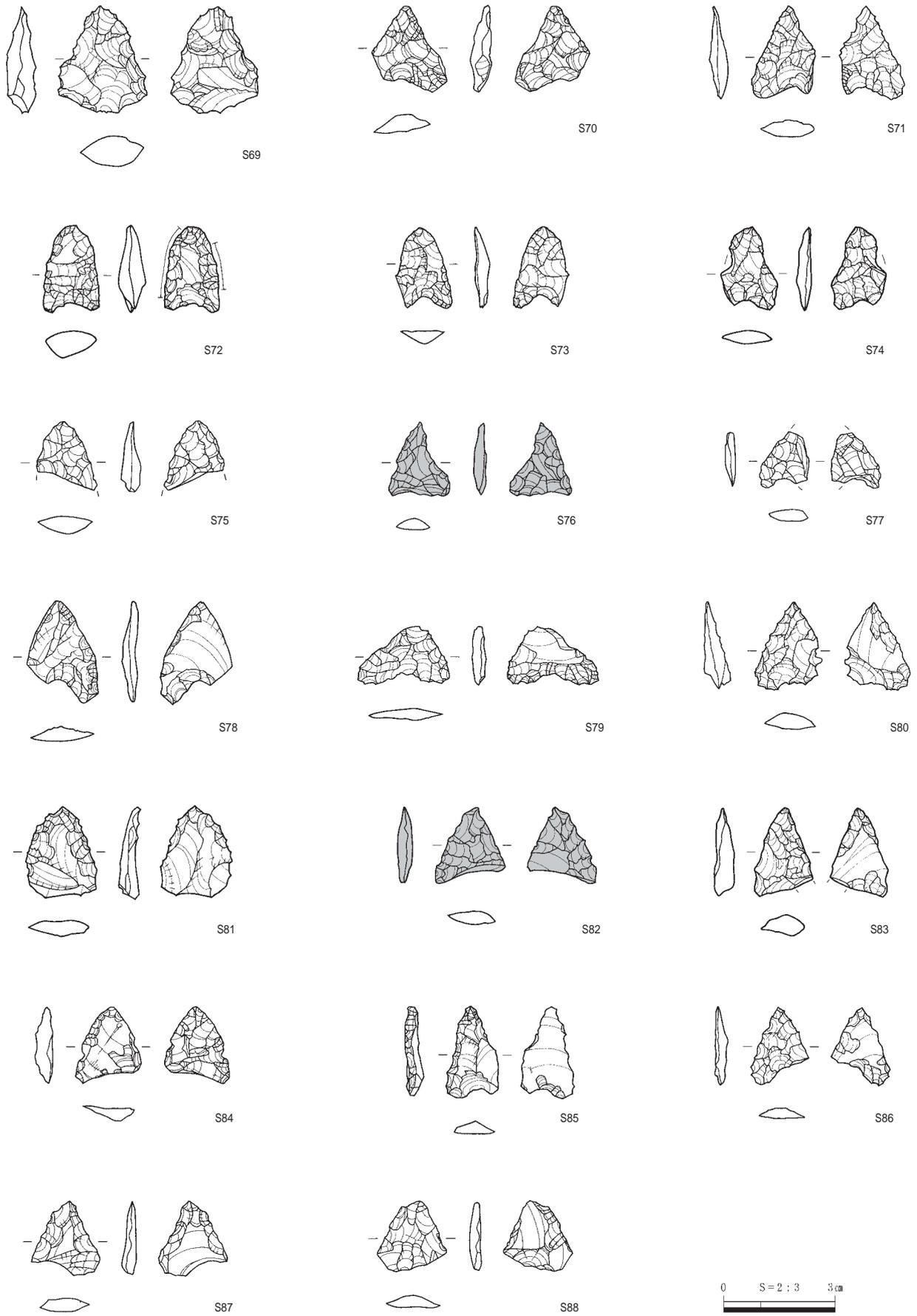
S57・S58は先述の分類に沿わない、イレギュラーな形態を持つ資料である。S57は、形態はc類に近いが幅広で、抉りはやや浅い。S58は全長1cm程度の極小品で、基部形態が特徴的である。

S59～S68はe類としたもので、抉りが比較的浅く、抉りの平面形が弧状を呈する一群である。S60～S64・S66・S67のように平面形が長三角形のもの、S59・S65・S68のように基部の外形がやや丸みを持つタイプがある。なお、S63・S64は二次的な被熱を受けた資料である。

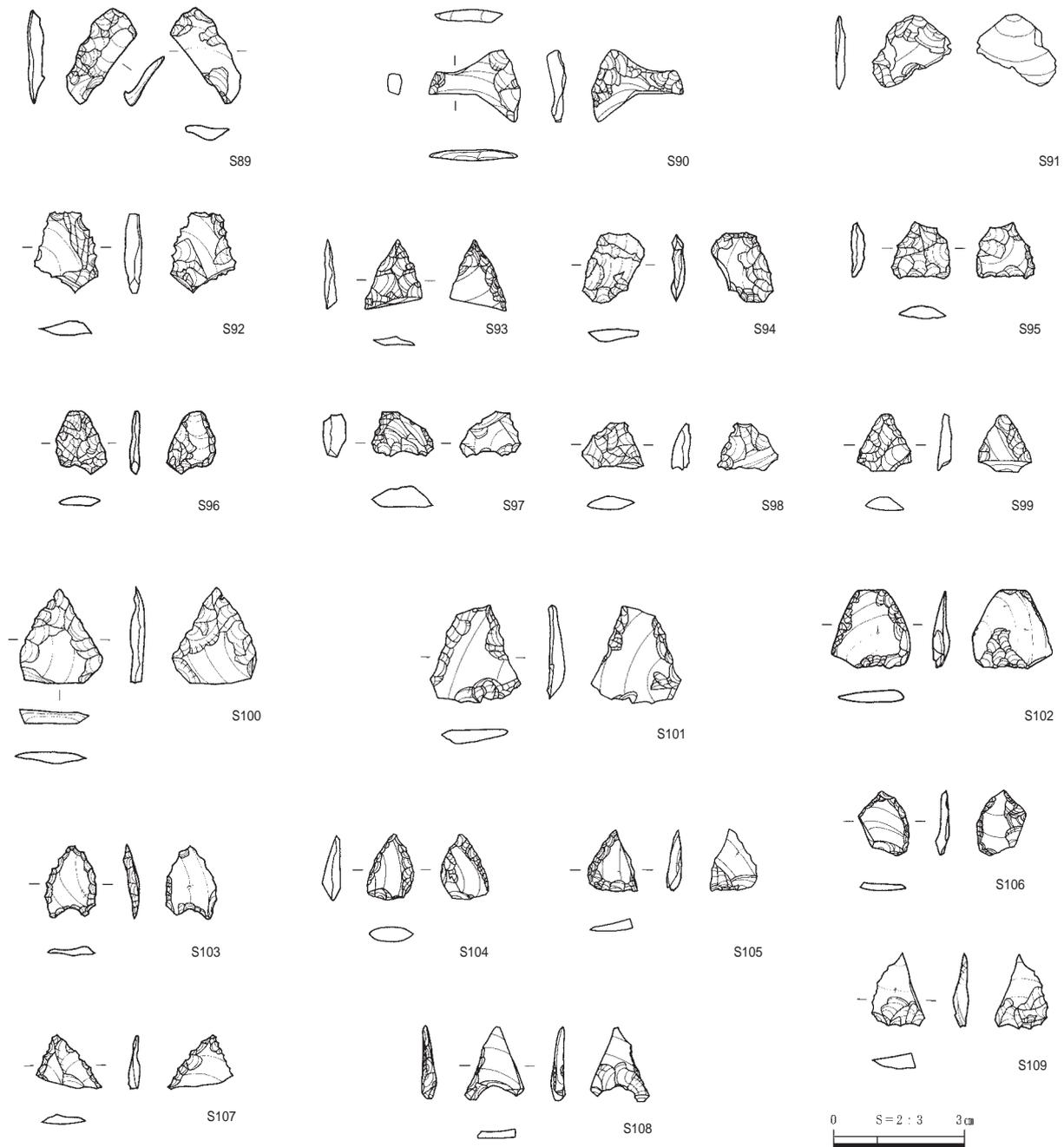
石鏃未製品(第36・37図、PL.14)

41点を図化した。薄手の剥片を素材とし、周縁から調整を施す傾向にある。未製品としているが、二次調整の途中で欠損したことにより、作業を中断したと考えられる資料も含む。例えば、S70は調整剥離が大き過ぎ、基部の一方を破損した痕跡が明瞭である。S73・S78においても同様な痕跡が確認され、失敗品と捉えることができる。S69～S77は比較的調整が両面共に進行している一群。S78～S88、S93、S95～S99は片面の調整が比較的進行していない段階で欠損等により作業を中断したとみられ、素材面を比較的広く残す。S89～S92、S94は、両面共調整の進行が少ない。S100～S109は両面共に調整が少なく、周縁を中心に施される。S103～S109は極小の剥片に調整を加えている。

素材の詳細については多くが二次調整のために不明瞭だが、比較的素材面の残る資料をもとにみると、両極打撃により作出された剥片を素材とするもの(S85・S97) またはその可能性があるもの(S81・S87・S88・S90)がある。また、素材剥片の両面共にポジ面となる資料が散見され(S78・S104)、分割面を有する素材から剥片を作出した可能性が窺われる。



第36図 石鏃未製品(黒曜石製)(1)



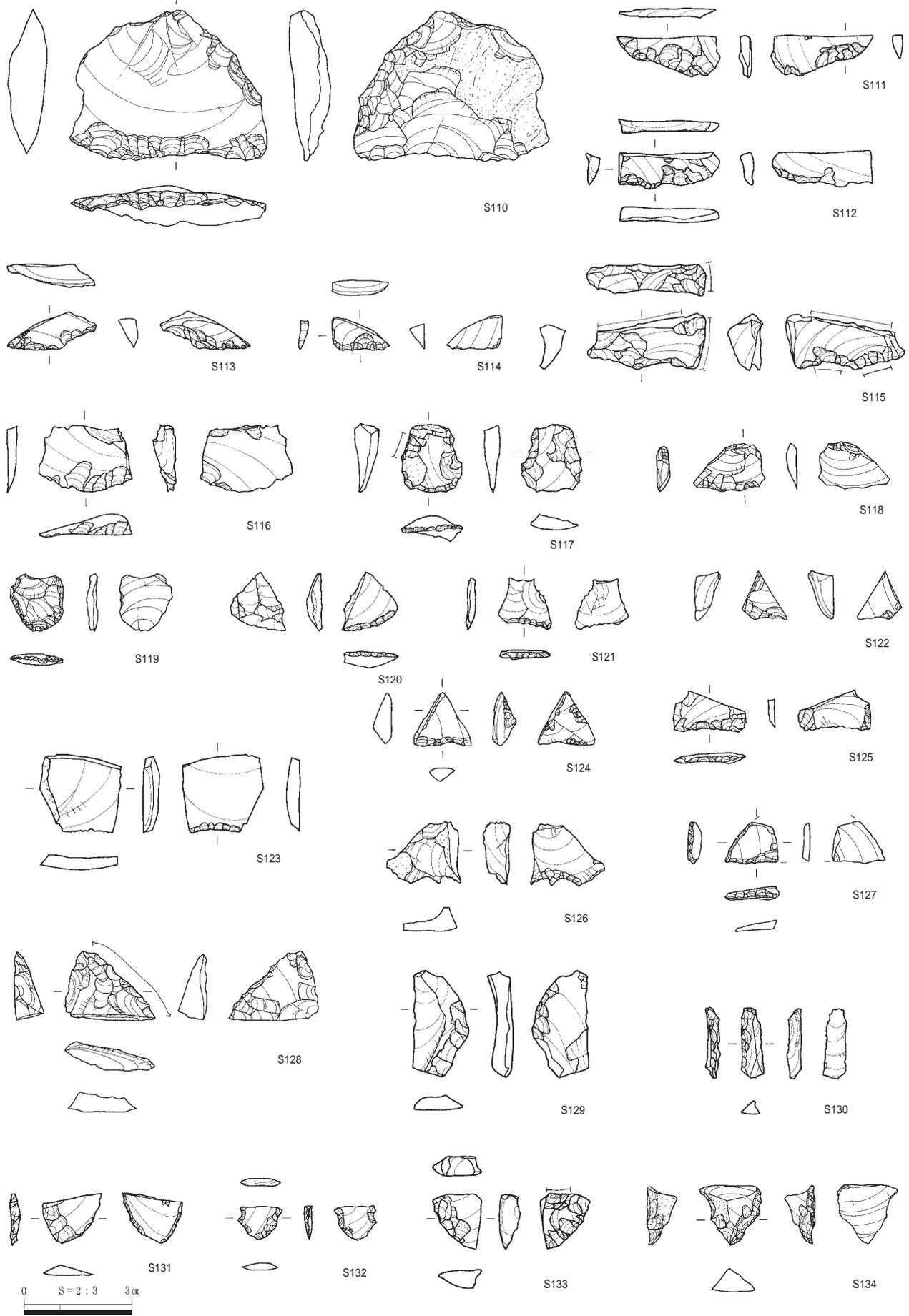
第37図 石鏃未製品(黒曜石製〔2〕)

スクレイパー(第38図、PL.14~16)

25点を図化した。S110を除き、小型の剥片を素材とする。

S110は大型の横長剥片を素材とし、裏面には原礫面が付着する。剥片末端の両面に調整を加えて刃部を作出しているが、素材主剥離面側が顕著である。表面右側縁においても調整が両面に施され、刃部形成が為される。大型の範疇に属する黒曜石製のスクレイパーは本資料のみで、やや表面の摩滅が進行している点も加味すると、遺跡内で生産されたわけではなく、製品を搬入した可能性がある。

S111~S116は、剥片の長辺のうち一方に調整を加え刃部とする。S111~S113・S115は両面、S114・S116は片面を調整している。S117は表面に原礫面が付着する。両極剥離痕のある剥片を素材とし、表面下縁を加工し刃部を形作る。S118~S127は小型剥片の二側縁の片面を加工し、刃部とする。S122・S123は中~大型剥片の破片を使用する。S123は刃部の調整が新しく、二重パティナを



第38図 スクレイパー〔黒曜石製〕

形成している。S126は表面に原礫面が残存する。S128は大型剥片の破片を使用し、二側縁を両面から加工する。S127は剥片の一側縁を刃部とする。S130は典型的な箭断面が確認でき、両極打撃による削片ないし剥片を素材とする。S131～S133は側縁の両面を加工し刃部を作出している。S134はやや厚手の剥片を用い、表面に原礫面が付着する。

石錐(第39図、PL.14・16)

S135は極小の剥片を使用し、表面二側縁を加工し錐状に尖らせている。S136は厚手の素材を用い、両面ほぼ全体に押圧剥離を加える。S137は明瞭な階段状剥離を伴う両極剥離痕のある石器削片を素材とし、その一方端を二次加工して錐状にしている。S138は表裏面共に両側縁を中心として押圧剥離を施し、先端を尖らせている。

加工痕のある剥片(第40図、PL.15・16)

S139は原形分割面を有する剥片を素材とし、刃部状に調整をわずかに加えている。この剥片は、本遺跡で作出されたとすれば法量的に最大クラスに該当する。S140は表面に礫面が付着するやや厚手の剥片素材を用いる。S141・S142は中～大型の剥片を素材とし、S142は原礫面を残す。S143～S145は中型剥片の縁辺に加工痕が認められる。S148・S149は小型剥片の縁辺の一部をわずかに加工し、刃部状にする。S150は表面上縁を刃潰し状に加工している。S151・S152・S154は小～中型剥片、S153は小型剥片を素材として利用したものである。

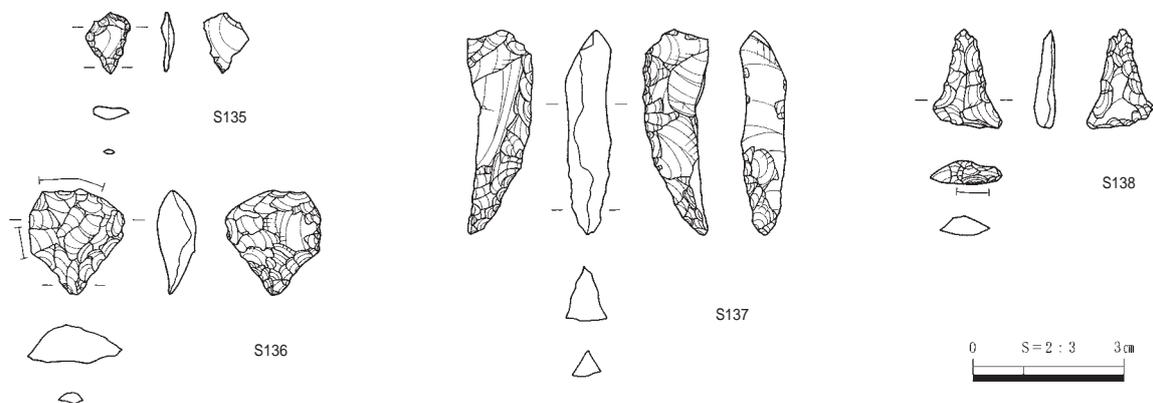
使用痕のある剥片(第41図、PL.15・16)

S155は縦長の中型剥片に微細剥離痕が確認できる。本遺跡で作出した剥片であれば、法量的に最大の範疇に入ると考える。S156～S161は中型剥片に若干の微細剥離痕が認められるものである。S156は中型剥片を素材とし、原礫面をわずかに残す。S159の素材となる剥片は表面に分割面が残存する。S160は、表面上側の階段状剥離が著しく、両極打撃による剥片を素材とした可能性がある。S162は、両極打撃による剥片の削片を使用したもの。表面右側縁に認められる潰れは、両極打撃によるものと考えられる。

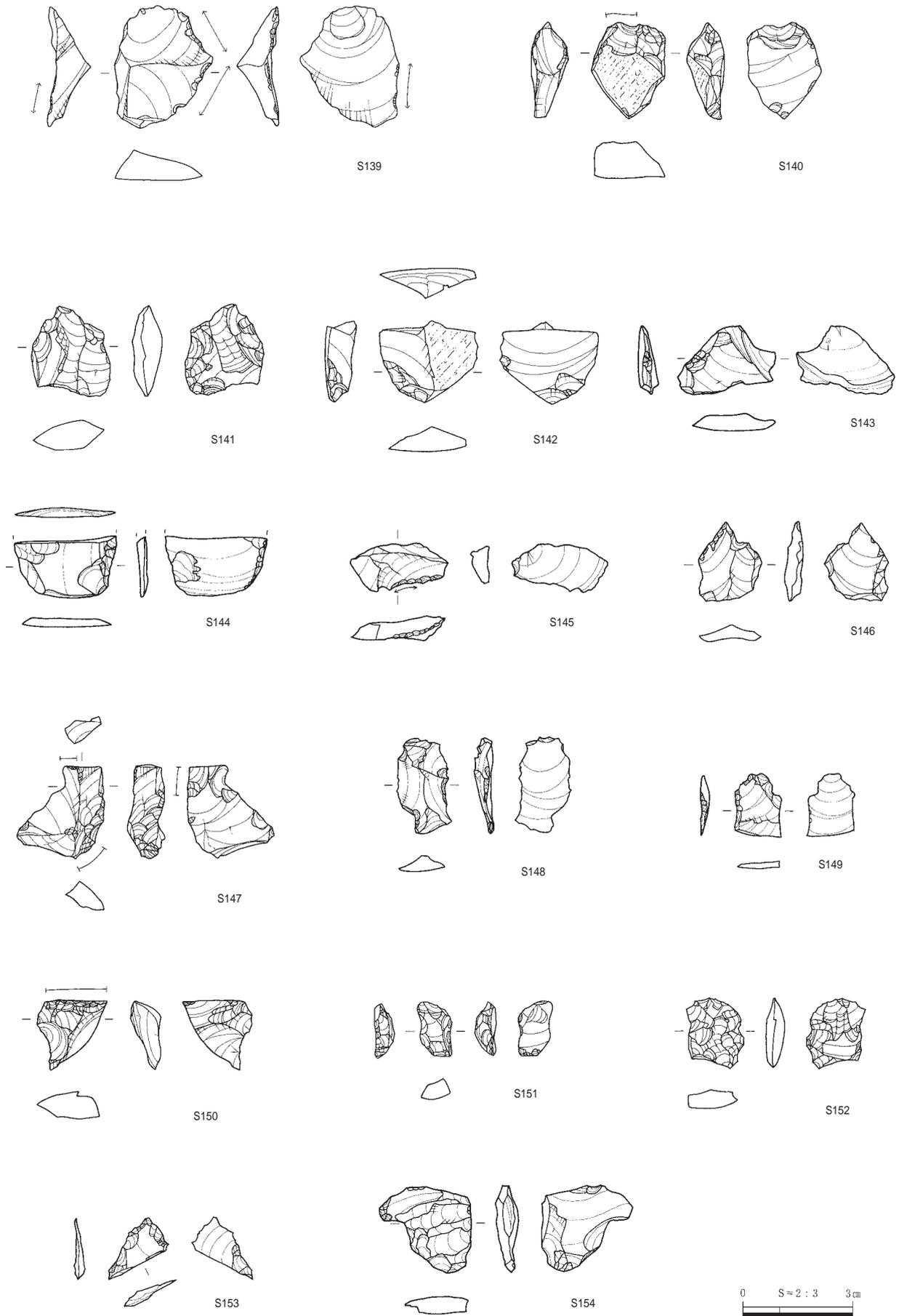
剥片(第42図、PL.15・16)

S163はやや厚手で、右側面に原礫面が付着する。S164・S165は小～中型の横長剥片で、背面に原礫面が残存する。S166は厚手の資料で、本遺跡出土剥片の中では大型に属する。石核の縁辺付近が剥離したものとみられる。

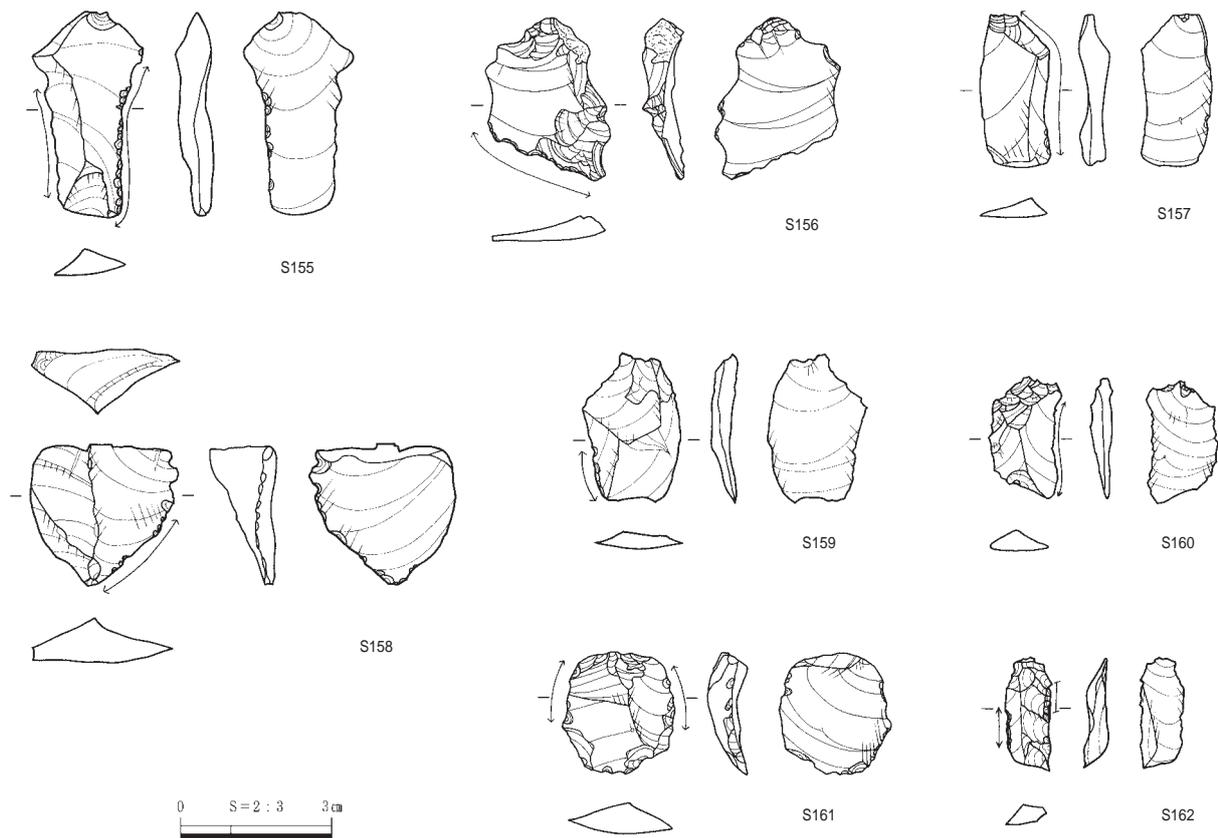
S167～S171は、表面の色調や質感にバリエーションがあり、それら外見上の差異が原産地の違い



第39図 石錐(黒曜石製)



第40図 加工痕のある剥片〔黒曜石製〕



第41図 使用痕のある剥片〔黒曜石製〕

に対応するかを検討するため、石材産地同定を実施した資料群である。黒曜石については色調等の特徴により10分類し分析を行ったところ、風化のため測定不明なものを除いては全て隠岐久見産となり、外見上の差異と採取地はこのたびの分析では対応しないという結果となった。分析の詳細については、本章第4節1に掲載している。

S172は、両極剥離痕のある石器削片の可能性を持つが、明瞭な潰れが認められないため、剥片として掲載した。表面には、上・下・左側面からの剥離が認められる。また、剥離後の二次的な被熱痕跡がある。S173は表裏面に残る剥離面が比較的大きく、石核の縁辺部が剥離した可能性を持つ。S174は左側縁の一部に潰れがわずかに認められることから、両極打撃で剥片を作出する石核に由来する可能性がある。

両極剥離痕のある石器(第43～46図、PL.15・16)

両極打撃による明瞭な痕跡として、縁辺の潰れ、階段状剥離、対向する剥離痕を挙げることができる。ここでは、これらの有無や組合せにより両極打撃痕跡の軽重を整理し、痕跡の明瞭なものから順に述べていくこととする。両極打撃に伴う最も明瞭な痕跡を潰れとし、階段状剥離は執拗な加撃を裏付ける補助的な属性とする。次いで対向する剥離痕となる。なお、折断等により一方側を欠損し情報を失った資料についても、遺存側の痕跡が両極打撃に起因する可能性が高いと判断した場合、本項に含めている。

S175～S179は、対向する側縁に潰れが確認できる一群である。

S175は上・下縁及び左側縁に激しい潰れが認められる。上・下面には階段状剥離が確認でき、執拗な加撃を受けた様子が窺える。右側面は横方向に折断している。S176は上・下・右側縁が潰れ、左側面は横方向の折断により情報を失う。S177は上面が箭断面で、後に当該面を打面としてさらに



第42図 剥片〔黒曜石製〕

両極打撃を行っており、上・下縁に潰れが確認できる。左側面はその際に横方向に折断した可能性がある。S178・S179は、上・下縁に潰れがあり、右側面には箭断面が形成される。

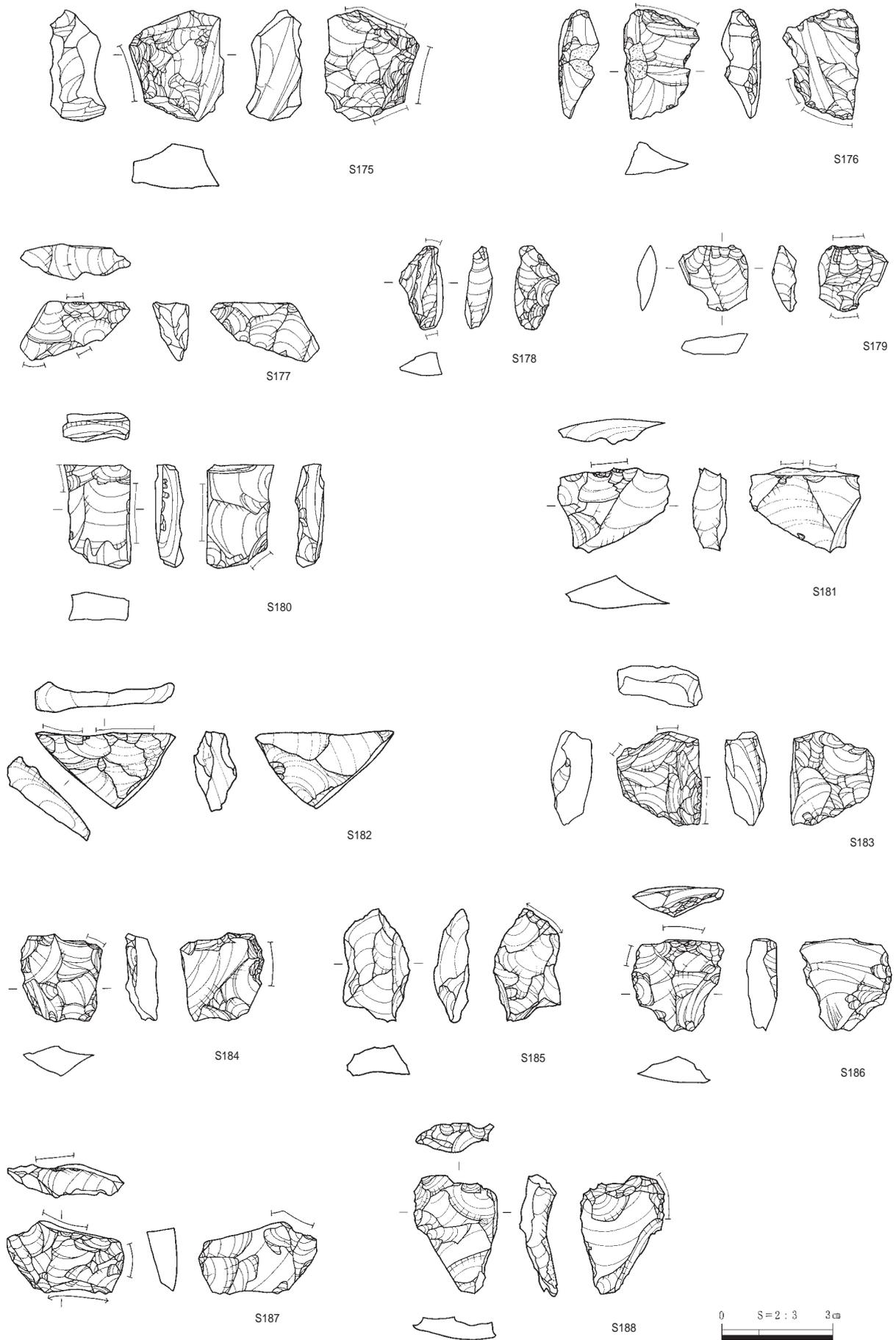
S180～S199は剥片の一側縁以上に潰れがあるが、対向はしない一群。ただし、剥離は対向する。

S180は左・右・下縁に潰れがある。そのうち、右側縁は横方向の折断面を打面とした加撃により潰れが生じている。剥離痕が比較的大きく、剥片を作出していた可能性がある。剥離面の観察から、最終的には横長方向に据えて使用したことが窺える。S181は上縁に潰れが生じている。右側面から下面にかけては剥片作出により大きく剥離し、左側面も横方向の折断で情報を失う。両極打撃による剥片

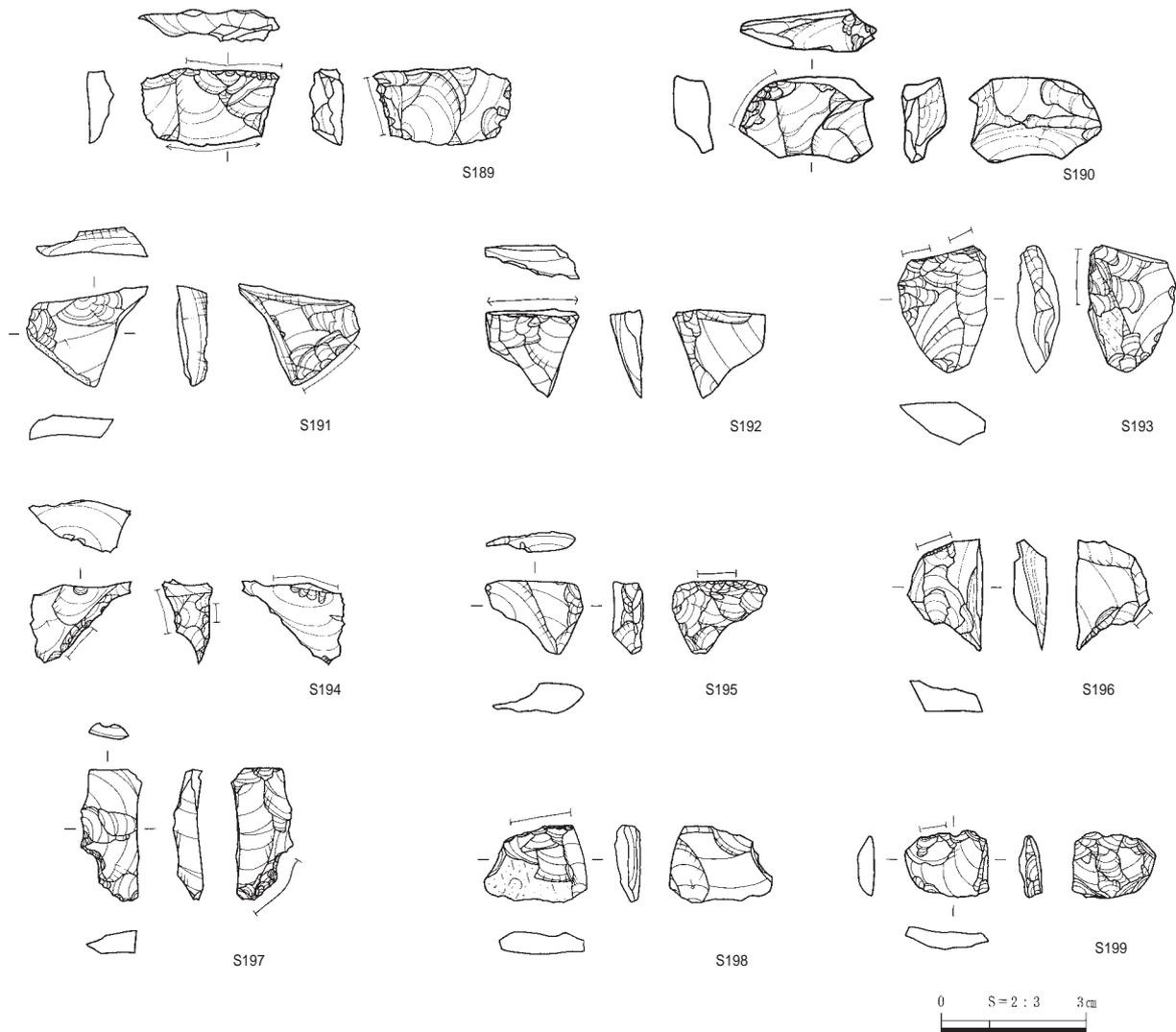
作出が窺われる資料である。S182は上・下面からの剥離痕が認められ、上面は階段状剥離がみられ潰れも著しい。左側面は横方向に折断するが、これは両極打撃の際に生じた下方からの反作用により欠損したと考える。S183は上・下・右側面からの剥離痕があり、右側面が特に著しい潰れを伴い、上縁にも若干だが潰れが確認できる。剥片剥離痕が比較的大きく、石核として使用した可能性が窺える。S184は上・下面からの剥離痕が認められ、上縁と左側縁はわずかだが潰れている。また、下縁には微細剥離痕が確認できる。上面から右側面にかけては著しい欠損のため情報を失う。S185は上・下面からの剥離痕を有するが、左・右側面は大きく欠損する。上縁には微細剥離痕が認められる。S186は上・下・左・右側縁に剥離痕を有する。潰れは上縁と左側縁に認められる。S187は上・右側縁が潰れる。上・下・左・右側面からの剥離が認められ、左・右側面の剥離が明瞭である。また、下縁には連続する微細剥離痕を有する。S188は上・下面、左側面上位に剥離が確認でき、左側縁には若干潰れが生じている。右側面は縦方向の剥離、左側面の多くは横方向の折断により情報を失う。S189は上・下・左・右側面からの剥離が認められる。縦長方向での使用後、横長方向に転位して使用している。上・右側縁には潰れが確認でき、下縁には微細剥離痕を有する。S190は上・下・左側面からの剥離痕を有し、上・左側縁には潰れが生じている。下・右側面は折断により情報のほとんどを失う。S191は上・下・右側面からの剥離が認められ、下縁は潰れている。上面からの剥離は前段階に生じた折断面を打面とする。左側面は横方向の折断で情報を失う。S192は上・下面からの剥離痕を有し、上縁には潰れが生じている。裏面は両極剥離痕が明瞭で、その際に左側面は折断したと考える。S193は上・下・左・右側面からの剥離痕があり、上・右側縁には潰れが確認できる。左側縁に認められる細かい剥離は、押圧剥離の可能性もある。S194は上・右側面からの剥離痕、それぞれの縁辺に潰れが確認できる。右側面には、表面側と裏面側からの剥離痕が認められるが対向はしていない。S195は下から左側面にかけて折断し欠損する。剥離は上・右側面、左側面下位からのものが認められ、上縁は潰れている。S196は上・下面からの剥離痕があり、上縁は潰れを生じている。左・右側面は折断により様相は不明である。下縁が鋭利に尖り、平面形はノッチ状を呈するが厚みがないため、偶発的に生じたものと考えられる。S197は右側面に縦方向の箭断面を形成し、上・下・左側面からの剥離痕が残る。左側縁には潰れが認められる。S198は表面に原礫面が付着する。潰れは上縁に認められるが、下面は欠損のため不明。剥離痕については上・下面からのものが確認できる。S199は上・下面に階段状剥離が認められ、執拗に加撃される。潰れは上縁で僅かに確認できる。本資料は厚みに乏しいことから、両極打撃を二次的な調整に使用した可能性がある。

S200～S214は、剥離痕と潰れは認められるが、共に対向しないものである。

S200は、上面から右側面にかけて剥離痕、潰れがある。上面には階段状剥離がみられ、幾度も加撃を受けている。下面から左側面にかけては大きく欠損し様相が不明だが、欠損後、左下から下縁にかけて微細剥離痕が入る。S201は上縁が激しく潰れ、対する下面は大きく割れ、欠損している。左側縁下位と下縁には微細剥離痕が認められる。S202は上面(原礫面)を打面とし、執拗な打撃が加えられる。そのため上縁は著しく潰れ、階段状剥離等上面からの剥離痕が多数確認できる。下面は横方向に折断しており様相は不明である。S203は上面から剥離痕が確認でき、潰れを伴う。また、当該方向から下方へ巻き込むような剥離により、下面の大半を欠損している。右側面には剥離痕が残るが、左側面は欠損し情報を失う。欠損後、下縁には微細剥離痕が入り、二次的な使用が窺える。S204は上・下面共に割れて欠損するが、上面に階段状剥離、下縁にはわずかに潰れが確認できる。下縁の潰れは

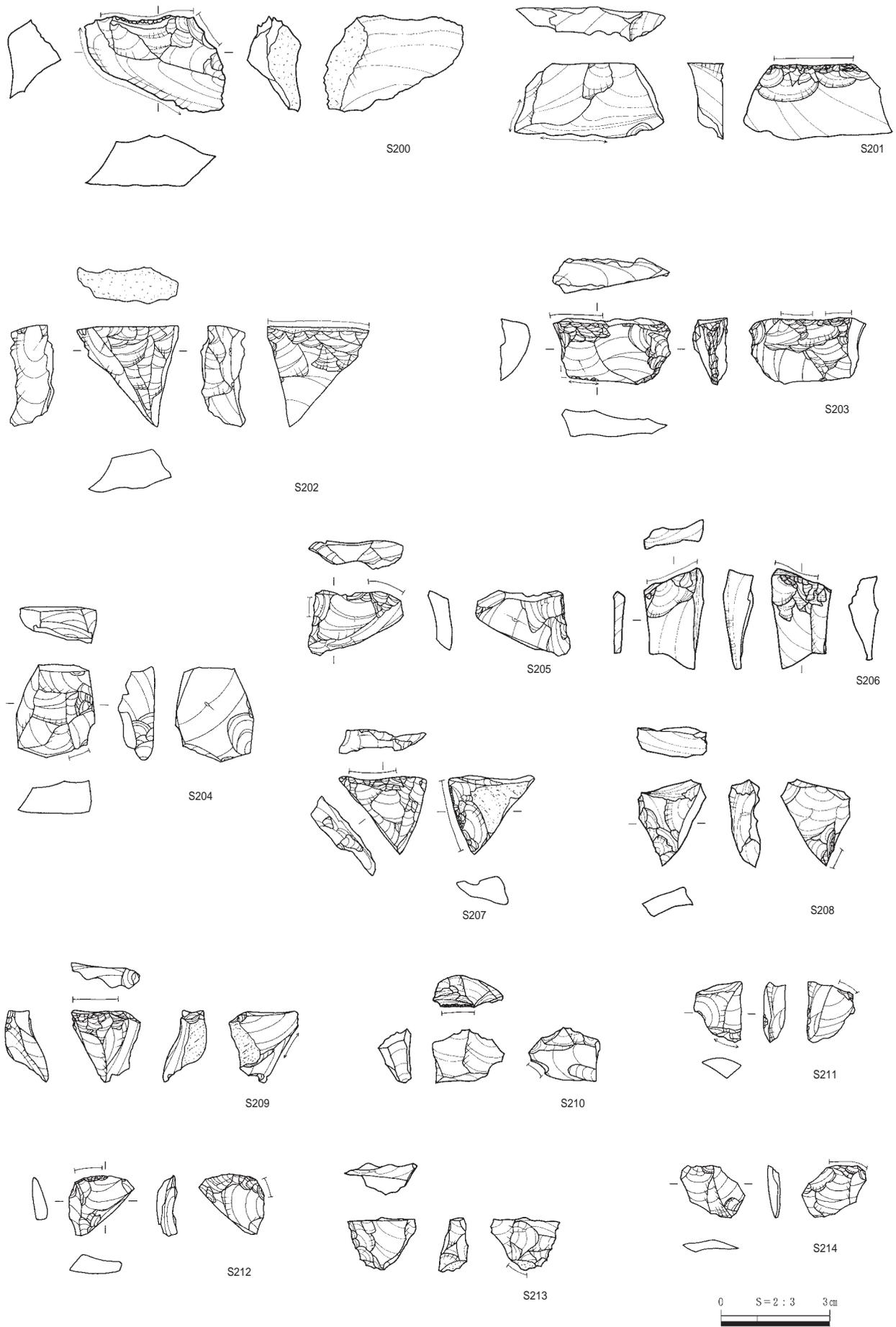


第43図 両極剥離痕のある石器(黒曜石製)(1)

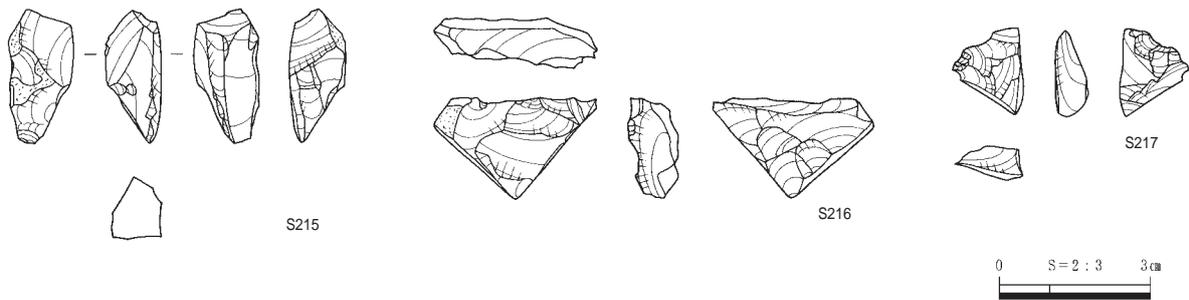


第44図 両極剥離痕のある石器(黒曜石製〔2〕)

折断後のもので、総じて剥離痕は無い。S205は上・左側縁に潰れが認められる。右側面から下面にかけては折断により情報を失う。S206は上縁が潰れ、著しい階段状剥離が認められる。一方、下面は折断し様相は不明である。右側面は横方向に折れて欠損し、左側面は縦方向の箭断面が形成される。S207は上・右側縁に剥離痕、潰れが確認でき、上面からの剥離は折断面を打面として加撃している。左・下面は、折断により欠損し様相は不明である。S208は上面と右側面を横方向の折断により失う。剥離は上・左側面から施され、左側縁には潰れが伴う。S209は上面からの剥離痕、潰れが確認できる。同縁辺には二次的な使用に伴う微細剥離痕が確認できる。下面から左側面にかけては欠損する。S210は上・下縁に潰れがみられるが、上縁の潰れは裏面側の打撃によるもので、下縁のそれとは対向しない。剥離痕は上・右側面からのもので、左側面は下方からの箭断面が形成される。S211は上・下・左側面からの剥離痕が残るが、対向していない。上縁には潰れが伴い、下縁には微細剥離痕が認められる。右側面は横方向の折断のため情報を失う。S212は剥離痕、潰れが上・左側面に認められるが、残る下・右側面を折れにより失っているため、様相は不明である。S213は上・左・右側面からの剥離痕があり、下縁には潰れが認められる。上面は折れており、その後打面転移して当該面を打面としたと考える。ただ、剥離痕は左側面からのものが明瞭で対向するかどうかは判然としない。S214は薄手の資料である。上面からの剥離が認められ、わずかに潰れも確認できる。下面は欠損のため様相



第45図 両極剥離痕のある石器(黒曜石製)(3)



第46図 両極剥離痕のある石器(黒曜石製〔4〕)

は不明である。

S215～S217は対向する剥離痕を持つが、縁辺に潰れが認められない一群である。ただし、後述するように剥離痕が対向するかどうか判断が難しい資料についてもここに含めている。

S215は上・下面からの剥離痕が認められるが、下面からのものは僅かである。右側面は縦方向の筋断面が形成され、上面は剥片作出に伴い折断する。S216は明瞭な潰れは無いものの、上・下面に階段状剥離が認められ、執拗に加撃されている。上面は古い折断面を打面とするが、下面は欠損のため残存状況が不良で、それぞれの剥離が対向しているかどうか明確ではない。左・右側面は折断により様相が不明である。S217は上・下・左側面からの剥離が認められるが、下面は横方向の折断により多くを失っており、様相は明瞭でない。右側面は横方向の筋断面を形成している。

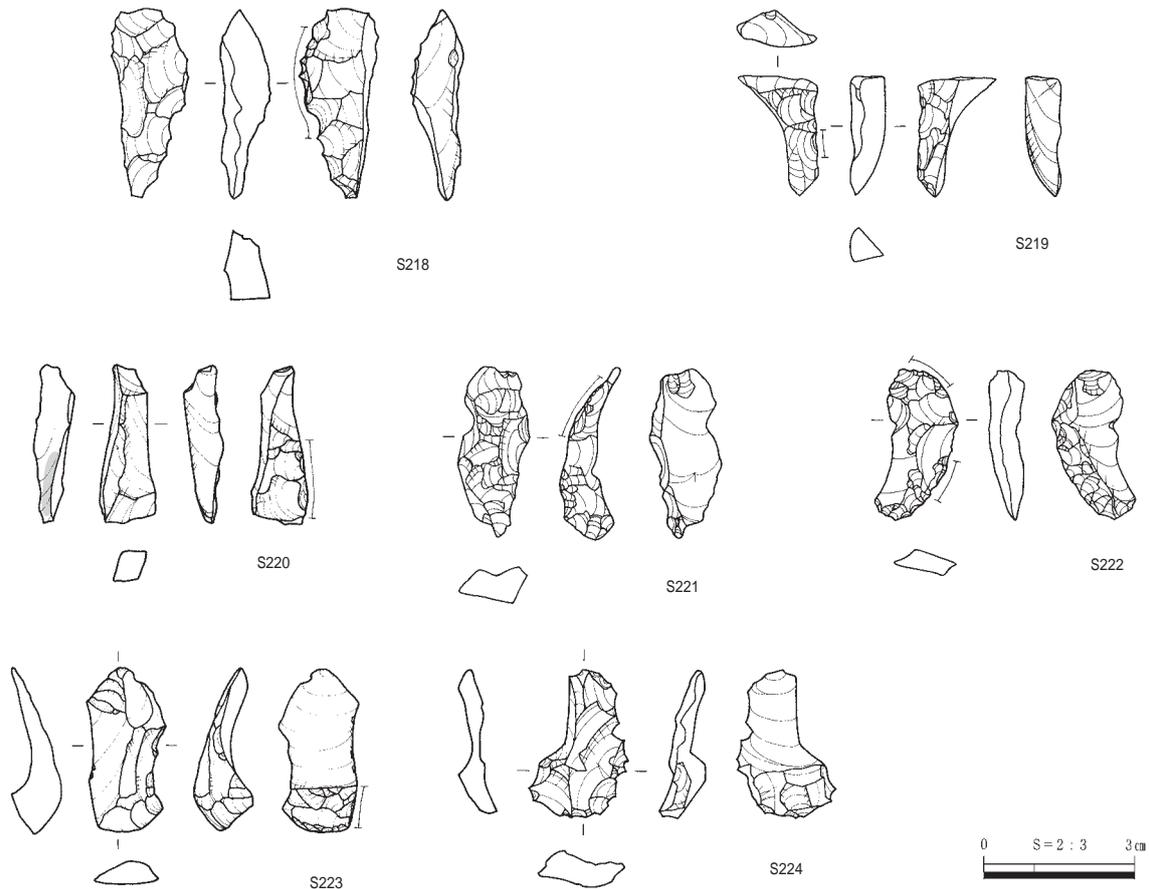
以上、両極剥離痕のある石器を打撃痕跡に着目し概観してきた。なお、本報告では当該石器の形成要因に注目し、～の可能性を示した(23頁参照)。両極打撃による剥離痕が剥片作出に伴うか否か判別が難しいため、多くが・のいずれに相当するか不明だが、剥離痕が比較的大きいS180・S181・S182等がに該当しよう。については剥片素材のS198・S199等が該当し、こうした薄手の資料に施された両極剥離痕は二次調整に伴う可能性を示している。

両極剥離痕のある石器削片(第47図、PL.15・16)

S218は下・左・右側面からの剥離痕が認められるが、右側面からのものが多く、縁辺には潰れも確認できる。左側面はほぼ縦方向の筋断面を形成している。二次的な被熱を受けた資料である。S219は右側面からの剥離が顕著で、刃部形成等二次的な調整の可能性がある。一部潰れを伴う。左側面は端部が肥厚気味に割れている。S220は上・左側面からの剥離痕が認められ、左側縁には潰れもみられる。右側面は縦方向の筋断面をもって折断する。S221は右・下面からの剥離痕があり、右側縁には一部潰れが伴う。S222は剥離痕が上・下・右側面に確認できる。左側面は折断のため不明である。また、潰れは上・右側縁にみられる。右側面の裏面側は比較的細かな剥離が連続して施され、両極打法を使用した二次的な調整の可能性がある。S223は上・下・左・右側面からの剥離痕を有するが、下面は縁辺にわずかに認められるのみである。左側面は裏面側に潰れを伴っている。S224は上・下・右側面からの剥離痕が認められ、左側面は折断し欠損している。

石核(第48～51図、PL.15・16)

S225は本遺跡で出土した石核のうちでは法量が最大で、長さ5cm、幅5.8cm、厚さ2cmを測る。本資料は、H3グリッドの台石等礫石器がまとまって検出された地点(H3-8)で出土した(第24図、巻頭図版1)。大型剥片を素材とし、剥片剥離は縁辺から中心に向かって求心状に為される傾向にあり、形状は板状を呈する。ただ、他の出土資料と比較して器面の風化の進行が著しいことから、これら剥離痕は本遺跡搬入以前に施されたもので、素材として本遺跡に持ち込まれた可能性がある。

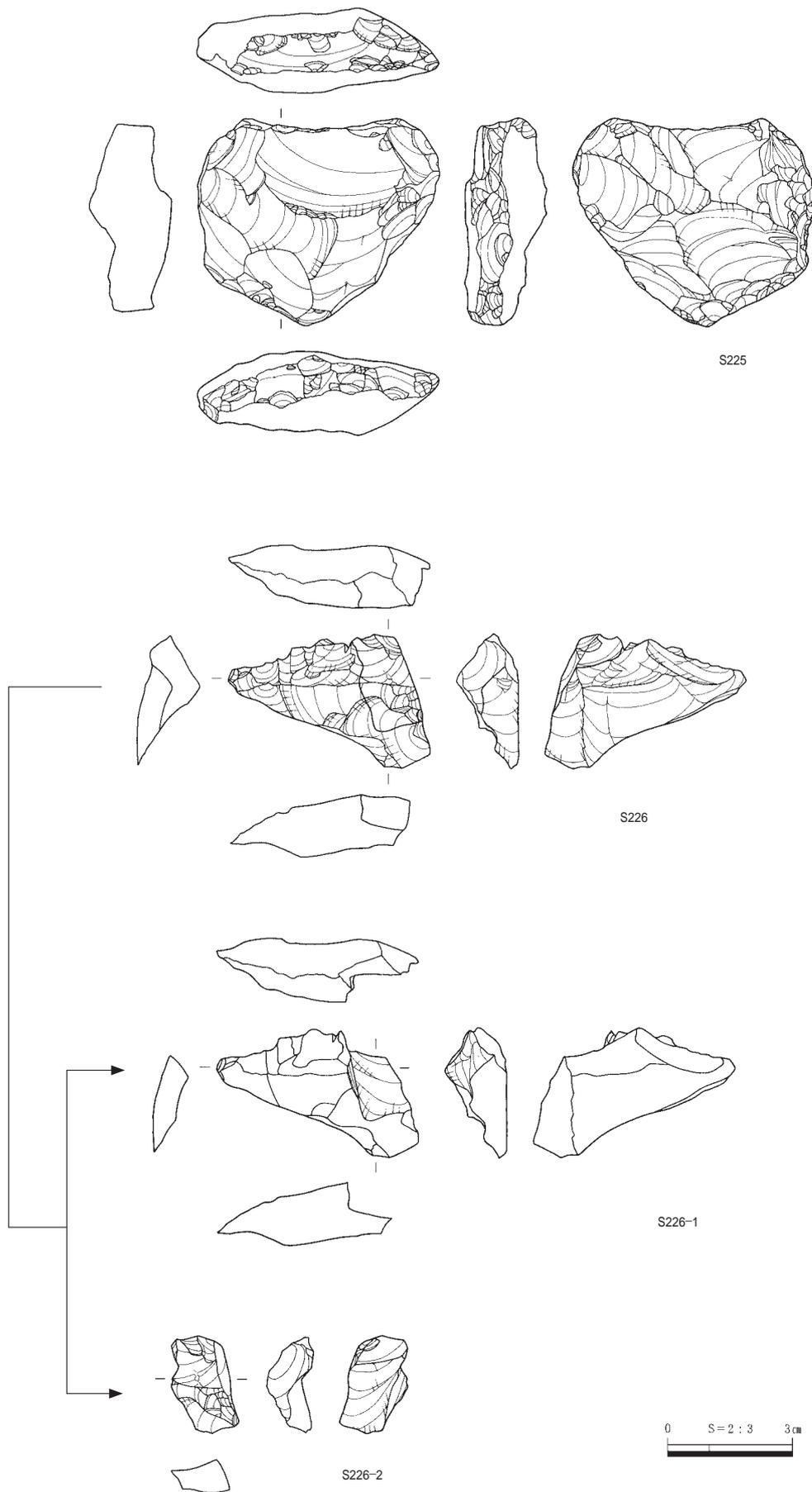


第47図 両極剥離痕のある石器削片〔黒曜石製〕

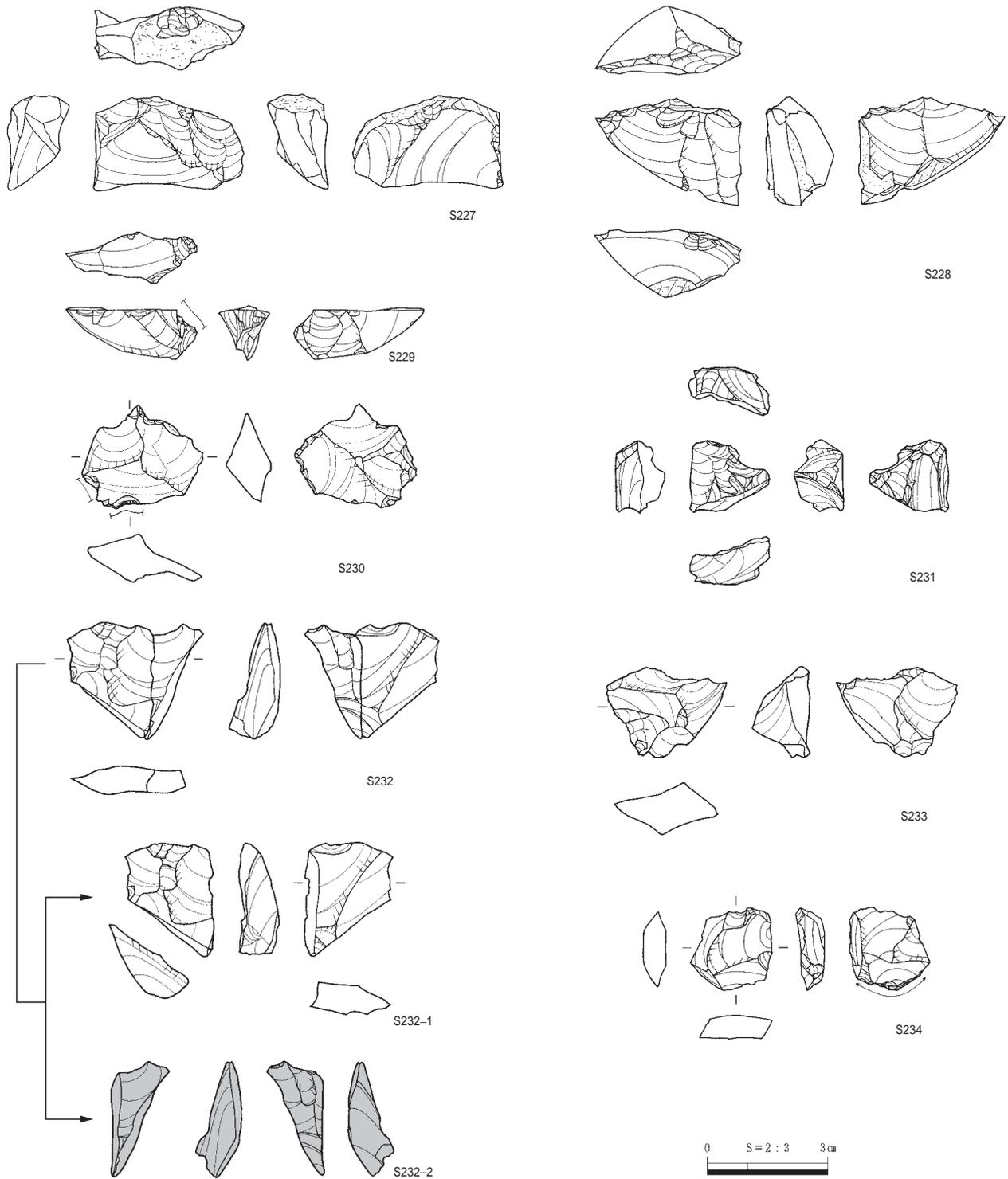
S226 ~ S234は剥片を両面で作出し、形状が概ね扁平な形状を示す一群である。S226は接合資料で(石核S226 - 1、剥片S226 - 2)、H3 - 10において互いに近接した位置関係で出土した。剥離方向は不規則で、両面で剥片を作出している。剥片S226 - 2は裏面側上縁からの加撃により生じている。S227は上面に礫面が付着する。S228は上面からの剥離が中心で、下面は横方向に折断している。S229は右側縁上寄りに潰れが確認できる。上面が横方向に折れ様相が不明となる。剥離方向は一定ではない。S230は上・下・左・右側面からの剥離痕が認められ、明確ではないがそれぞれが対向している可能性が高く、両極打法による剥片作出が窺える資料である。S231は両面に上・下面からを主とした剥離が確認できる。下面は横方向に折断している。S232は接合資料で、石核S232 - 1はH3 - 9、剥片S232 - 2はG3 - 24で出土した。石核は下面を横方向の折断により失うが、上・下面からの剥離痕が認められ、両極打法によるものと推察される。剥片は両極打撃の際に下方からの反作用により折断したもので、剥離後に二次的な被熱を受けている。S233は剥離方向が一定ではないが両面で剥片が作出される。S234は上・下・左・右側面からの剥離痕があり、両極打撃によるものと考えられる。下縁には微細剥離痕が確認でき、二次的な使用が窺える。

S235 ~ S237は片面で剥片作出される概ね扁平な形状を示す一群である。S235は右側縁が執拗な加撃を受け、潰れている。S236は上面と裏面が原礫面となる。表面側の右側縁に連続した調整痕が認められるが、石核を二次的に加工したものかは判然としない。S237は上面を打面とし、表面側に敲打痕が残る。左側面から下面は横方向に折れ欠損する。

S238 ~ S242は両極打撃による剥離が認められる資料で、両極剥離痕のある石器に分類することもできる。ただ、縁辺の潰れ等使用に際する明瞭な痕跡が無いこと、剥離の大きさが比較的大きいこと

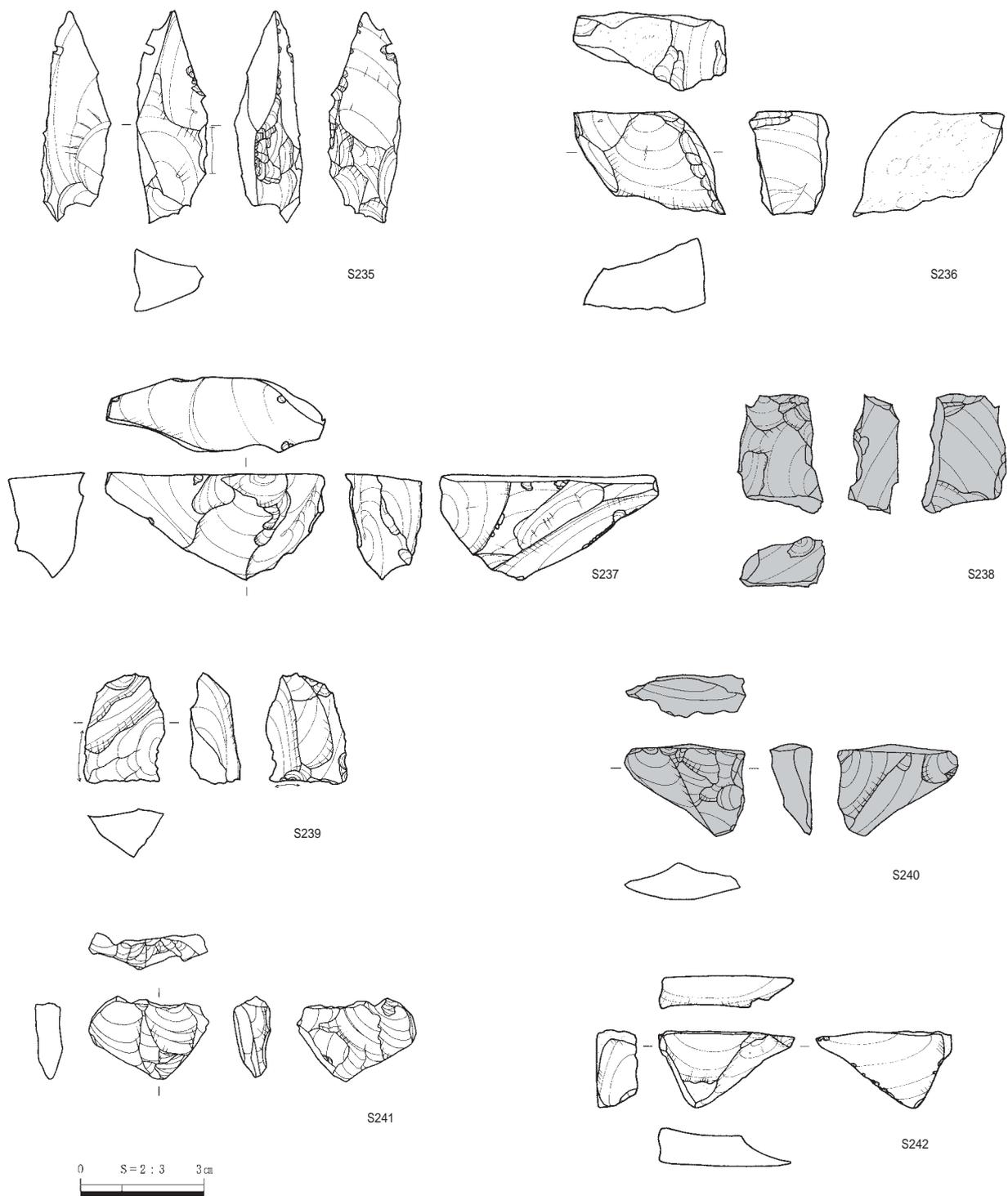


第48圖 石核(黑曜石製)(1)



第49図 石核(黒曜石製)(2)

から本項に含めた。S238は上・左・右側面からの剥離が確認できる。右側面からの剥離が比較的大きいが、上・左側面からの剥離は小さい。下面は折断により様相は不明である。全面に二次的な被熱を受けている。S239は上・下・左・右側面からの剥離が認められ、右側面からの剥離が大きい为上・下・左側面からの剥離は小さい。右側面は横方向の折れが生じ、裏面側を中心に欠損する。左・下縁には微細剥離痕が確認できる。S240は上・下・右側面からの剥離が認められ、形態的に楔形を呈する。全面が二次的に被熱している。S241は上面からの剥離が認められるが、下面はその際の巻き込むような剥離のため情報を失っている。S242は上面からの剥離により右側から下面が欠損する。

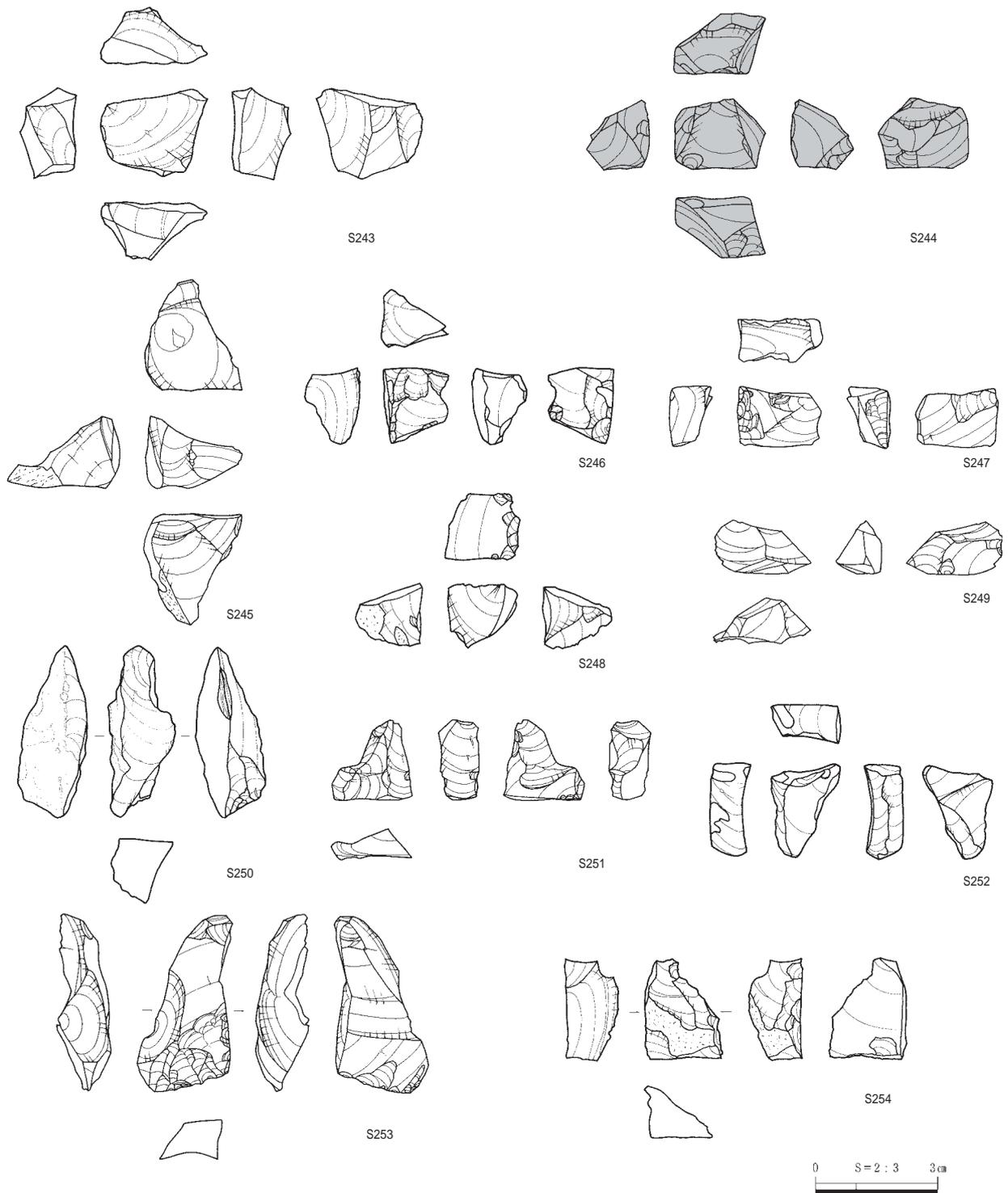


第50図 石核(黒曜石製)(3)

S243～S249は打面転移を繰り返し、打面・剥離作業面が一定でない一群である。形状は多面体、サイコロ状を呈する傾向にある。S244は二次的な被熱を受けている。S245は上面が大きく割れ情報を失うが、打面の異なる剥離がいくつか確認できるため、本分類に含めた。S246は表面上縁と左側縁(裏面側)に階段状の剥離が認められ、最終段階の剥離は執拗な加撃によることが窺える。S247～S249は小型のサイコロ状を呈し、極小サイズながら剥片を作出していると考えられる。

S250～S252は石核の小口側から加撃し、縦長の剥片を作出する一群。

S253は大型のスクレイパーを転用し素材とするが、剥片作出は左側縁からの一回のみである。



第51図 石核(黒曜石製)(4)

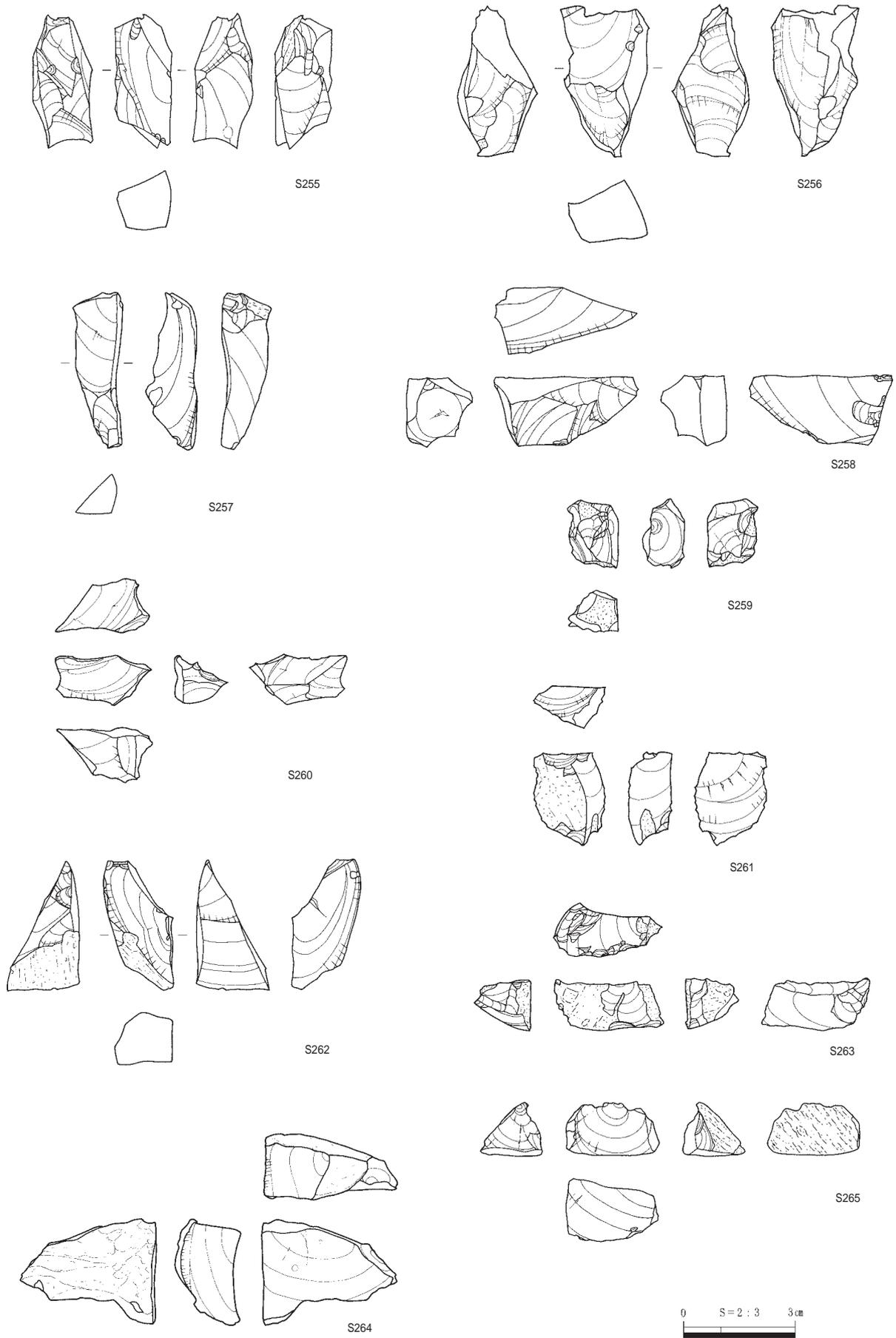
S254は礫面を残す資料で、上面からの剥離が確認できる。

原形(第52図、PL.15・16)

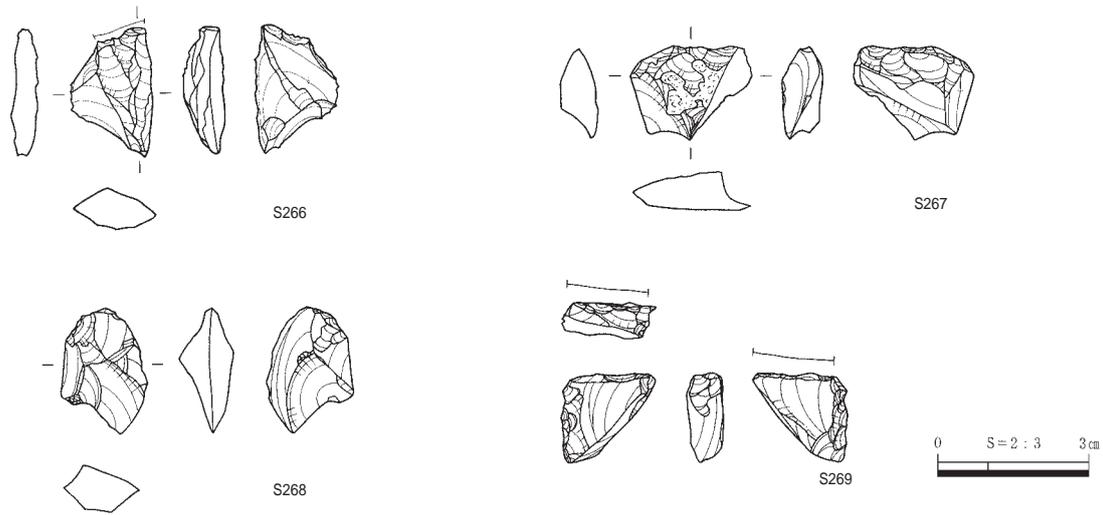
全24点のうち、11点を図示した。法量は長さ1～4.2cm、幅0.8～3.8cmを測り、石核と同様に小型の範疇に属する。

石器破片(第53図、PL.15・16)

確認した13点のうち、4点を図示した。いずれも両極打法を用いた石器の可能性が考えられるが、大きな剥離や折断により情報を失い詳細が不明なため、本項に掲載した。



第52図 原形(黒曜石製)



第53図 石器破片〔黒曜石製〕

S266は上縁が潰れ、同方向からの剥離が認められる。左側面からは大きな剥離痕が入り、下面の情報を失う。S267は上面からの階段状剥離が確認できる。右側面から下面にかけては横方向に折断する。S268は上・左側面からの剥離があり、右側面は折断する。S269は上縁裏面側に潰れが認められ、左側面からの剥離痕が残るが、右側面から下面にかけては横方向に折断しており様相が不明となる。

その他の石材製石器(第54・55図、PL.16・18)

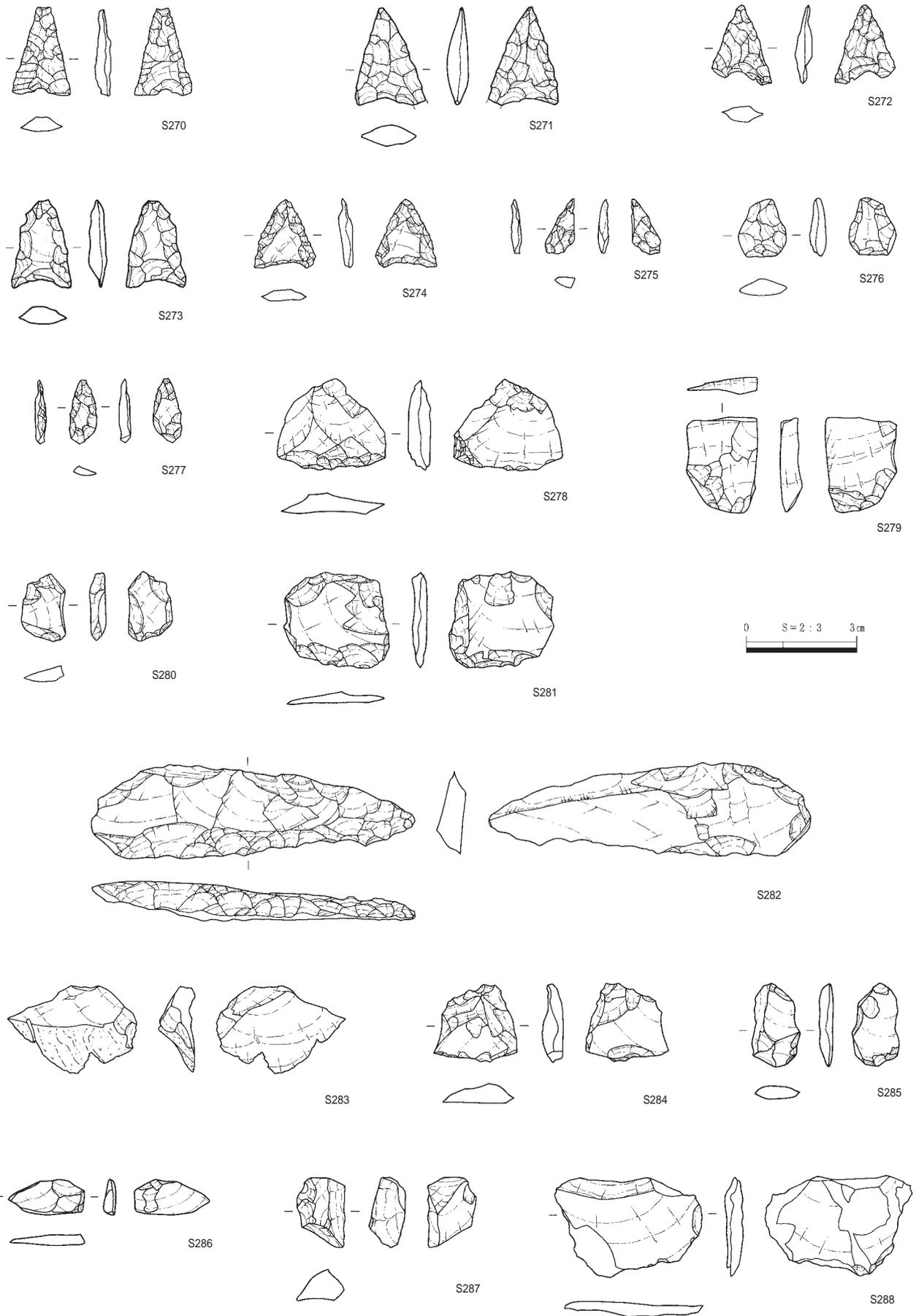
本項では黒曜石製石器以外の打製・磨製石器についてまとめる。

S270～S277は石鏃である。S270～S276は凹基式石鏃で、いずれも基部の抉りが浅く、黒曜石製石鏃でまとめた石鏃の形態分類(第3章第3節、第31図)によると、e類となる。平面形態は、S270～S273が長三角形、S274～S276は正三角形に近い形状を呈す。S277は欠損により全体形は不明だが、細身でやや尖り気味の基部であったものと推測する。蛍光X線分析による産地同定の結果、S270は隠岐加茂産の黒曜石、S271・S276は東伯郡三朝町坂本産に同定されている。S270は肉眼観察において安山岩系と判断していたため、同定結果は参考にしつつも本項目に掲載することとした。また、S272～S275・S277は肉眼観察によりサヌカイト製と推測される。

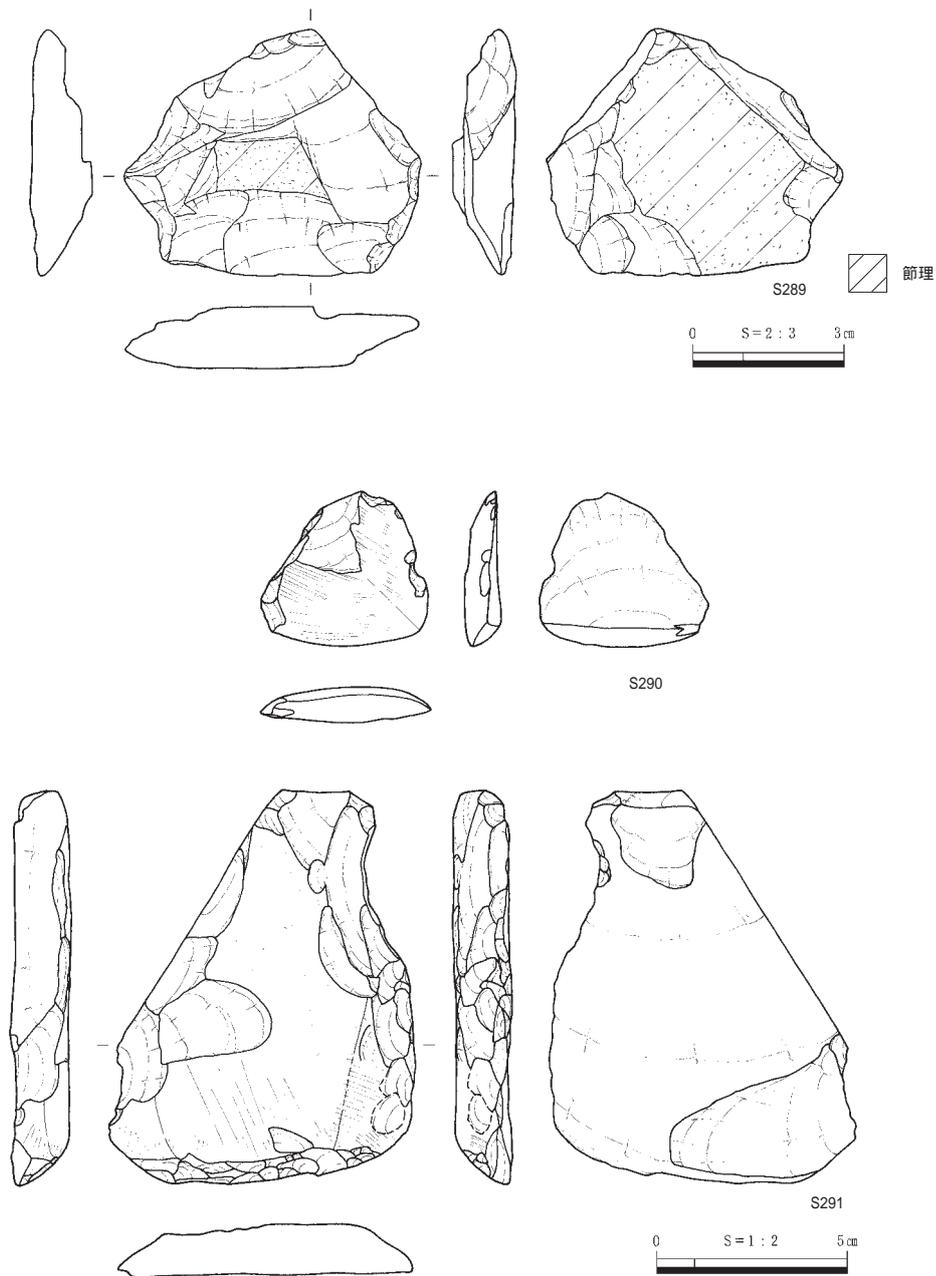
S278～S281は両極剥離痕のある石器である。S278は剥離が上下に対向し、主剥離面には下方からの階段状剥離、背面には上方からの大きな剥離痕が認められる。流紋岩又は流紋岩質凝灰岩製と推測する。S279は上下に剥離が対向し、最終的に上面が折れ失われている。右側面には縦方向の剪断面が認められる。石材はサヌカイトによく似るが断定できない。S280は上方からの階段状剥離が認められ、下方は潰れている。右側面には縦方向の剪断面が認められる。サヌカイト製と推測される。S281には上下・左右に対向する剥離が見られる。蛍光X線分析による産地同定の結果、産地不明の高尾原A遺物群とされている。

S282はスクレイパーである。主剥離面に連続する調整が加えられ刃部が形成される。サヌカイト製と推測される。

S283～S286は加工痕のある剥片である。S283は表面に原礫面を残す。S284は上下に細かな調整が認められ、縁辺に鋭いエッジを作出している。S285は縦長剥片の上下に細かい調整を加えている。S286は横長の剥片を素材としている。蛍光X線分析による産地同定の結果、S283は三朝町坂本産、



第54図 調査地内出土石器(安山岩ほか製)(1)



第55図 調査地内出土石器(安山岩ほか製)(2)

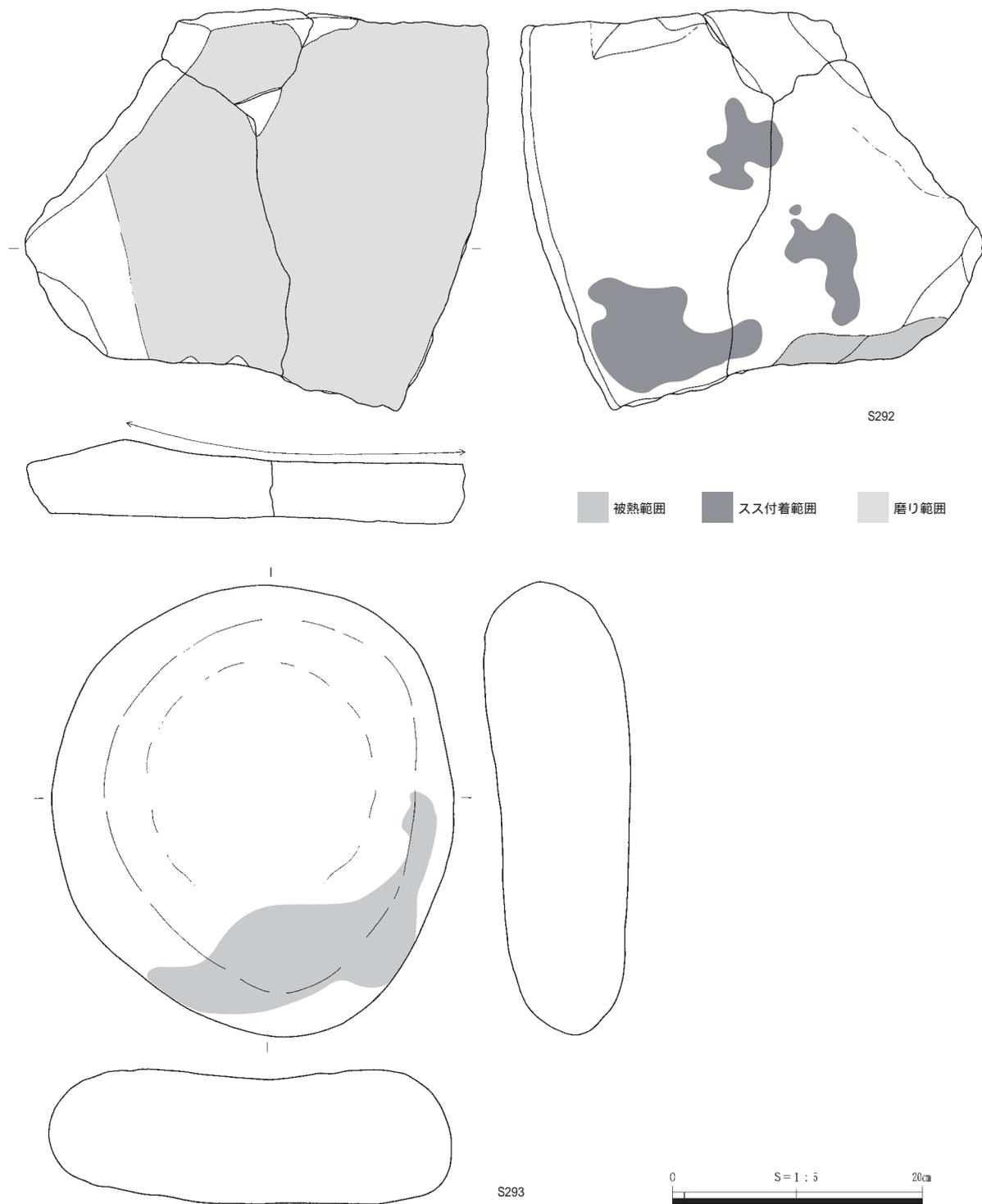
S284は産地不明の高尾原383遺物群、S285・S286は金山東産に同定されている。

S287・S288は剥片。蛍光X線分析による産地同定の結果、S287は金山東産、S288は産地不明の高尾原459遺物群とされている。

S289は両面に節理面を残す板状扁平な石核。両面ともに剥片の作出が認められる。蛍光X線分析による産地同定の結果、高尾原A遺物群とされている。

S290は磨製石斧の刃部。安山岩製である。

S291は流紋岩質凝灰岩製の打製石斧である。重さ169gで本遺跡出土剥片石器の中では最大の製品となる。節理に沿って剥離した板状素材を利用し、刃部は主剥離面に作出される。刃部両縁の形状は直線的で基部にくびれをもつ。右縁に刃と平行する方向の擦痕が認められ、部分的な研磨の可能性もある。



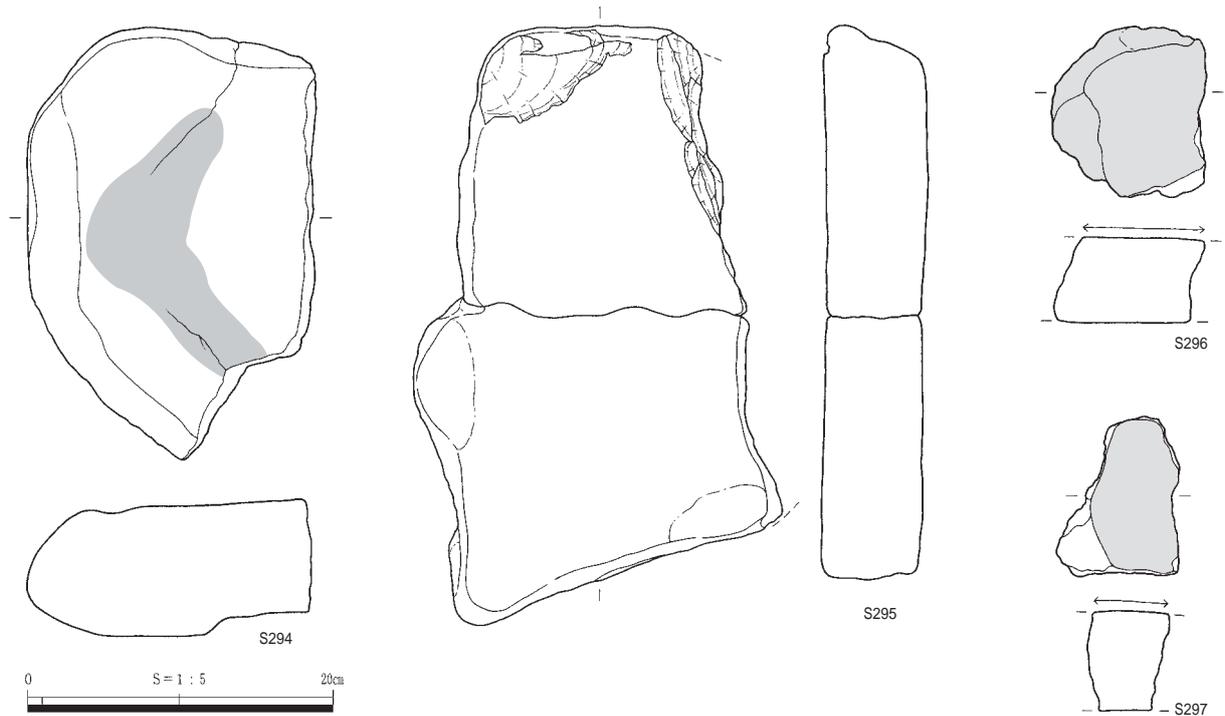
第56図 調査地内出土石器(台石〔1〕)

礫石器(第56～58図、PL.17・18)

S292～S297は安山岩製の台石である。S292～S294は表面に被熱による赤化が認められ、S292では煤も付着している。S294は、表面及び右側面にも赤化が認められる。

S292・S293はH3グリッドにおいて上下に重なって出土した(第24図、巻頭図版1)。S292は平面五角形状で、ほぼ全面に磨り痕が見られる。S293は円形を呈し中央部がやや凹む。S294・S295は明瞭な使用痕は見られないが、表面は平滑である。S296・S297は表面に磨り痕が認められる。

S298～306は安山岩製の敲石である。S298・S302は下端に敲打痕が認められ、S299～S301は両端部



第57図 調査地内出土石器(台石) (2)

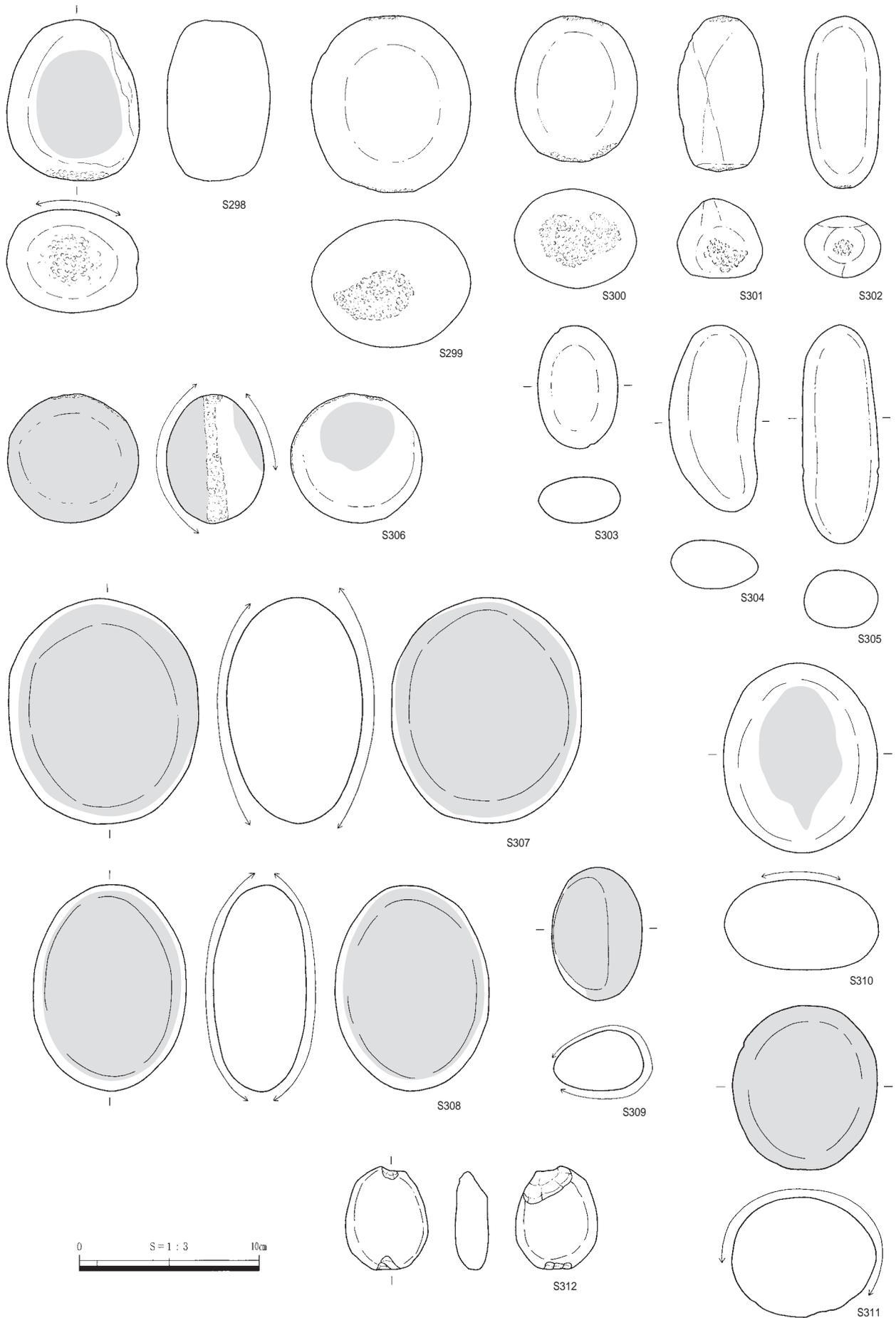
に敲打痕が残る。S306は側縁部に連続して敲打痕が巡る。S303～S305は明確な使用痕は認められないが、棒状の形態から敲石と判断した。S298・S306は磨石としても併用したものとする。

S307～S311は磨石である。亜円礫を利用しており、S307は花崗岩製、S308～S311は安山岩製である。S312は両端部に打ち欠きをもつ石錘である。安山岩製である。

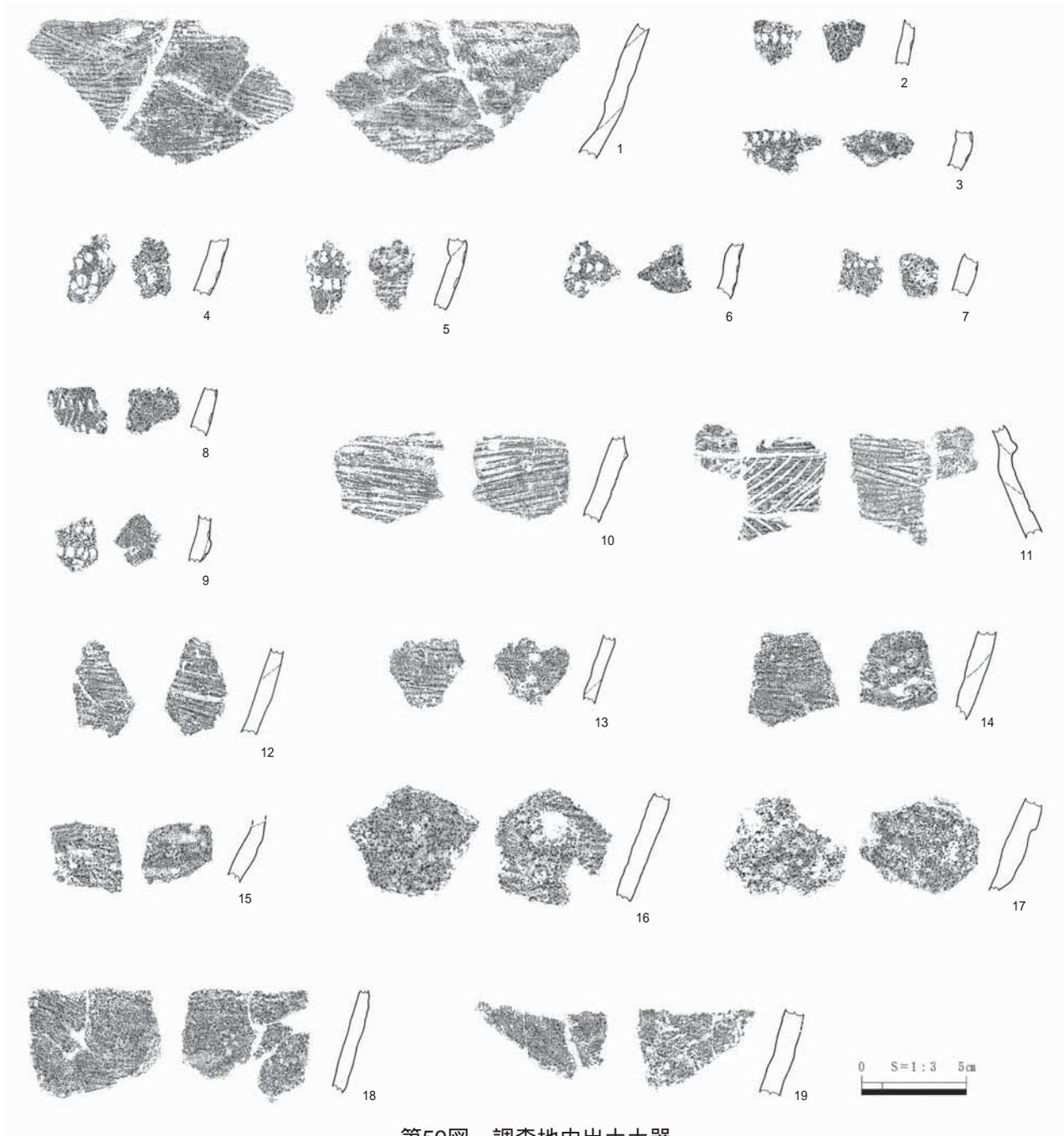
3 土器(第59図、表3、PL.18)

本調査において出土した土器は古代に帰属するとみられる数点の須恵器片を除くと、大多数は縄文土器である。本節1項で触れたとおり、縄文土器は全て破片資料で総出土点数は350点余りである。平面的な分布状況は石器のそれと重なり、H3グリッドを中心とした1区丘陵尾根筋に認められ、石器群と一連のものとして評価できる。器面調整は、摩滅により施文や調整が不明な資料を除くと縄文地のものは無く全て条痕地で、条痕工具は貝殻が主体となる。帰属時期は、前期初頭の西川津式が主体を占め、少数ながら早期末の長山式を含むと考える。本項では、施文や調整の比較的明瞭な資料19点を選別し、掲載した。

1は胴部片で、内外面に条痕が施される。条痕の幅が比較的狭いため、植物質工具による条痕の可能性もある。破面を観察すると微細な炭化物により黒色化しており、胎土中の繊維混入が想定される。早期末の長山式に該当すると考えられる。2～8は外面に連続する爪形文が施される一群で、西川津式A類と考えられる。9は隆帯を挟み上下に連続する爪形文を施す。長山式に該当か。10は外面に横位の微隆線が一条確認できる。西川津式B類。11は頸部資料。隆帯下の内傾する頸部中に深めの沈線が横走り、それを挟んだ上下には矢羽根状に沈線を施す。西川津式C類か。12～19は内外面に条痕ないしナデが施される胴部片で、いずれも西川津式の範疇と考える。



第58図 調査地内出土石器(敲石・磨石・石錘)



第59図 調査地内出土土器

【註】

(1) 石鏃の形態については、先学の分類があり(竹広1991、会下2002) 本報告の分類に際し参考とした。

【参考文献】

竹広文明 1991 「(3) 縄文時代の石器について」『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会

会下和宏 2002 「山陰地方における縄文～弥生時代の打製石鏃について」

『島根大学構内遺跡第11次調査(橋縄手地区2)』島根大学埋蔵文化財調査研究センター

表3 土器観察表

掲載番号	遺物番号		挿図番号	P L番号	グリッド名		層位名	種類器種	法量 (cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
	番号	枝番			大	小								
1	154		59	18	H3	13	a層	縄文土器 深鉢	器高6.4	外面貝殻条痕。植物質工具による条痕の可能性あり。内面貝殻条痕後ナデ。	やや粗	良	内外明黄褐色	長山式 繊維土器
	201・213・214		59	18	H3	4								
2	428		59	18	H3	18	a層	縄文土器 深鉢	器高2.2	外面爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面にぶい黄橙色	西川津式A類
3	658	3	59	18	G4	6	a層下	縄文土器 深鉢	器高1.9	外面ナデ後爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	西川津式A類
4	658	1	59	18	G4	6	a層下	縄文土器 深鉢	器高2.7	外面ナデ後爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	西川津式A類
5	139		59	18	H3	1	a層	縄文土器 深鉢	器高3.4	外面ナデ後爪形文。内面貝殻条痕後ナデ。	やや粗	良	内外明黄褐色	西川津式A類
6	658	2	59	18	G4	6	a層下	縄文土器 深鉢	器高2.7	外面ナデ後爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	西川津式A類
7	665		59	18	G4	7	a層	縄文土器 深鉢	器高2.0	外面爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	外面明黄褐色 内面にぶい黄橙色	西川津式A類
8	486		59	18	G3	20	a層下	縄文土器 深鉢	器高2.3	外面貝殻条痕後爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面にぶい黄橙色	西川津式A類
9	280		59	18	H3	10	a層下	縄文土器 深鉢	器高2.2	外面隆帯の上下に連続する爪形文。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明褐色	長山式
10	616		59	18	H3	18	a層下	縄文土器 深鉢	器高4.0	外面貝殻条痕。微隆線。内面貝殻条痕。	やや粗	良	外面橙色 内面黄褐色	西川津式B類
11	489		59	18	G3	25	根攪乱	縄文土器 深鉢	器高5.3	外面頸部隆帯。矢羽根状の沈線文。内面ナデ。	やや粗	良	外面にぶい黄橙色 内面明黄褐色	西川津式C類?
	65		59	18	G4	3	表土							
12	592		59	18	G4	3	a層下	縄文土器 深鉢	器高4.5	内外面貝殻条痕。	やや粗	良	外面橙色 内面にぶい黄褐色	
13	485		59	18	G3	20	a層下	縄文土器 深鉢	器高3.2	外面貝殻条痕。内面貝殻条痕後ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	
14	389		59	18	G3	25	a層下	縄文土器 深鉢	器高4.2	外面貝殻条痕。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	
15	483		59	18	G3	20	a層下	縄文土器 深鉢	器高2.9	外面貝殻条痕。内面ナデ。	やや粗	良	内外面明黄褐色	
16	918		59	18	D2	-	表土	縄文土器 深鉢	器高5.1	外面風化のため不明。内面貝殻条痕。	やや粗	良	外面明黄褐色 内面灰黄褐色	
17	580		59	18	G3	23	a層下	縄文土器 深鉢	器高4.4	内外面風化により調整不明。	やや粗	良	内外面にぶい黄褐色	
18	168		59	18	H3	18	a層	縄文土器 深鉢	器高4.8	外面条痕後ナデ。内面ナデ。	やや粗	良	内外面にぶい黄褐色	
19	587		59	18	G3	20	a層下	縄文土器 深鉢	器高4.2	内外面ナデ。	やや粗	良	内外面浅黄色	